

昭和三十年度

財團
法人

東洋文庫年報

東洋文庫

昭和三十年度東洋文庫年報

目次

一	戰中・戰後の沿革略	一
二	組織	元
三	職員	三
四	入庫圖書	三六
五	事業	七四
	1 刊行圖書	七四
	2 講演會・展示會	七九
	3 談話會	八〇
六	研究活動	八六
	1 機關研究	八六
	2 職員の研究業績	八六
附		
	1 東洋學術協會	八九
	2 ハーヴァード・エンチン・グラント運營委員會	九〇
	3 近代中國研究委員會	九一

一	序	1
二	第一章 緒言	2
三	第二章 基礎理論	5
四	第三章 実験装置	10
五	第四章 実験結果	15
六	第五章 結論	20
七	参考文献	25
八	索引	30
九	謝辞	35
十	附録	40

一 戰 中 ・ 戦 後 の 沿 革 略

岩 井 大 慧

戦 時 中 の 文 庫

昭和十二年七月四日に筆者は北京・天津の見學を了えて歸庫した。そしてその七日に日支事變が起つた。その後不擴大を叫びつゝ事變は漸次大きくなり、中支・南支へと擴がり、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争に突入してつた。緒戦の奇襲に成功したかに見えたが、昭和十七年春わが本土へ米機の初空襲を受けて以來、國際的にも貴重視されている文庫を保管する上に、萬全の處置を執らねばならない。心痛は茲に筆紙に盡し難い。

文庫の位置するところは隣に理化學研究所という建物がある所である。そこが本來の研究と共に戦時物資を製造していたことが、スパイによつて米國側には判つていたと見え、これが攻撃が屢々繰返えされた。理研攻撃の戸端尻を喰つて大きな迷惑を蒙つたこと三回に及んだ。

昭和二十年二月二十五日午後二時、雪の降つている時であつた。B 29 が都内に一三〇機襲來し、その一分隊の攻撃をうけた。庭内に九彈の焼夷彈を落下されたが、幸に大事に至らなかつた。建物の損傷は全くなかつた。

次は同三月四日の夜であつた。この時は庭内と屋根に十二個の焼夷彈を見舞われたが、幸に不發の間に敏速に處置した爲めに事なきを得た。三月九日の夜半から十日暁方に互つて、またまた B 29 一三〇機の來襲により下町地帯潰滅の慘事を呈したが、幸にも文庫附近には、一發も落下しなかつたので安堵の胸をなでた。

第三回は四月十二日午後十時頃から、十三日拂曉にかけての一七〇機の襲來である。理研のベンゾール貯藏庫に投下された一撃は、大きな火柱を建てた。全く白晝のような明さとなつたときは、もう駄目だと思つた。

六義園の一角に爆彈が落下し、その爆風の爲めに、本館の窓という窓全部の硝子が破壊され、殆ど戸外と同じ状態となつて了つた。隣の理研の火災は刻一刻と大きくなり、火の子は已巴と舞込んで来る。突然屋上フラットルーフに大音響が起つた。眞暗な階段を手さぐりで驅登つて見ると、エレベーターの塔の一角を破壊し、焼夷彈は火を吹いてゐる。その上敵の焼夷彈の架の大きなバケツを逆にしたような怪物がころがつていた。ゴシック屋根の銅板は爆風でハギ取られた。手早くこれを處理して、各階の闖入した火の子を消す。そのうちに庭の椎木に焼夷彈の焰がついて生木が燃え出す。登つて消す。頸にやけどをする。理研の藥品が燃え出し、異様な瓦斯が風上から吹いて来る。爲めに箕輪君が中毒で倒れる。筆者も聲が出なくなつた。咽喉を毒瓦斯に犯されたのである。せめて國寶圖書だけでも庫から出そうか、どうしようかと思ひ案じわづらつた。併し出さぬ方がよく、安全と考をきめて、火の子の消火に朝迄屋上から地階迄數百遍も往來上下した。ほのぼのと明くなりかけたときに、理研の火は貰わずに済んだ喜びと安心と疲勞で口もきけなかつた。兎に角防火は成功したのだ。全く三菱地所の技師藤村君の證言した通り、この建物はこの位の焼夷彈ではびくともしなかつたのである。

廿年五月十二日緊急理事會を召集して貰つた。戦局の不利は、わが海岸線に敵艦が出没し、本土が愈々戰場となるらしく感じられたので、緊急理事會を開き疎開を決定し、宮城縣と新潟縣に全圖書を送ることを決めた。ところがこの頃は繩、木箱、人夫、トラック等あらゆる疎開荷造條件は文字通り不利で、苦心慘憺の結果、六、七、八月と秋葉原驛から貨車積で發送した。幸なことに、途中いづれも無事で、目的の八倉庫に到着した。天佑と言うべきである。宮城縣疎開倉庫の物色、倉庫主との交渉、その保管等のことは星斌夫氏を臨時文庫員に囑託してこれに當つて貰つた。疎開中筆者は年二回宛各倉庫を巡視した。新潟の方へは未發送のうちに八月十五日を迎え、終戦となつた。終戦となつたが、社會不安は直ぐに圖書を疎開先から持ち歸ることを許さなかつた。途中で紛失の恐れも十分あるし、敗

戰の結果經濟界の變動が、財團の資産を根本的に崩壊して了つた結果、持ち歸る經費の出所がなくなつて了つた。全く途方に暮れるとは、こうした時のことであらう。困却手のつけようがない。

然るところ、二十三年十二月二十日付を以て在日歐米人が、一日も早く開館せよと迫る。前記したように、財團の基本金が崩れた今日、文庫自體の力ではどうにも手の打ちようがない。日本アジア協會 (Asiatic Society of Japan) 名譽幹事アラン・デル・デルレー氏から時の文部大臣森戸辰男氏に宛て、一刻も早く、文庫を疎開先から取戻し、開館に運ぶよう斡旋方を努力するようとの勸告狀が提出された。是れより先、昭和二十二年八月十五日、筆者は參議院囑託を命ぜられ、國會圖書館創設の爲めの調査機關の一員になつた。ここに幸にも衆參兩院の議員と談合する機に恵まれた。議員中に大學時代の同級乃至先輩もいたことも勇気づけて呉れた。それで機會ある毎に、今次のわが財團の崩壊は、われわれ當事者の失態に於いてなれるものではなく、國家の方策の誤りの結果招いたものであるから、責任は國家が負うべきであると説いて了解を得、國家の援助によつての復興を企畫した。毎金曜放送會館の六階でアメリカ側の委員と會談したのであるが、彼等の意見では、一私法人に國家の金を使うことは、憲法五十八條に抵觸する。タツクスペアに濟まない。であるから、今度出来る筈の國會圖書館の一部とすることであることであれば、國庫の金を文庫の一部に出してもよからうということであつた。かくて二十三年國立國會圖書館の設立と併行して、契約を結んで文庫の圖書部だけをその支部とし、研究部は從來通り財團經營とすることとなつた。二十三年八月五日理事會もこれを承認した。

二十四年二月五日疎開先き前記宮城縣八つの倉庫から鐵道によらずトラツク運輸を開始し、(特殊裝置のもの三臺を作る)、延べ六十三回往復、一往復九百六十キロメートル、各倉庫からの距離に多少の増減あるも、運搬行程五萬七千六百キロメートル、二萬壹千リツトルのガソリンを消費して、三、四と續け、五月廿六日を以て無事全部歸庫した。輸送責任者は菅原牧之助氏、トラツクは相模鐵道トラツク部である。六月一日から鋭意整理に着手し、十月一日

から再開を目標として排架整頓を進めたところ、豫定通りに運び、内外東洋學者の待望に副うことが出來たのは、文庫員一致の協力の賜であつた。

昭和二十四年四月十五日、國會圖書館支部としての第一回の仕事として、また文庫の疎開返還後再開披露の意味もあつて、フランス・ザビエル渡來四百年が来る八月十五日にあたるので、當該月日では暑中休暇中でもあり、炎暑の候でもある爲め、これを避けて四月に開催することとなつた。カトリック文化協會と共催で行つた。戦争中戦後と、斯かる催しに飢えていた學者は欣んで來觀した。文庫所藏のキリシタン文獻、上智大學、東京大學等の出品も願ひ、日歐文化交渉文獻目錄を印行し、十日間に互つて展示會を開いた。G・H・Qからも文化關係の來賓も見えた。盛大であつた。

これより先き財團崩壞の結果、文庫の窮乏に陥つてゐることを察知された文部省は昭和二十二年一月三十一日、東洋文庫を國立圖書館の一部として文部省へ寄附しては如何との申出があつた。これは時の文部省社會教育局長柴田直氏、同文化課長長島孝氏、帝國圖書館長岡田溫氏の三名、理事和田清氏宅に來り、東洋文庫側の如何なる條件でも容れるから國家に寄附して欲しい。來るべき國立大圖書館の一翼として保管運営したい。文庫從來の事業はそのまま繼續し、その構成も組織も變更を加えないとの申出があり、同年三月二十二日理事會を開き、協議の結果、文部省移管の申出に對しては斷ることに決定した。同二十二年八月五日の理事會は國立國會圖書館が創立されたら、これと提携して國會より運営資金の給與を受くることを文庫側から條件を國會側に提出することを決め、條件條項をいろいろ協議した。昭和二十二年十一月以來前後數回に互り、國會圖書館創立委員會と契約に關する條項につき前回理事會提出のものにては、司令部の承認得難きこと、筆者も屢々折衝したがどうしても、進捗しないので、若干項目を修正する必要を感じ、二十三年八月五日理事會に協議を乞ひ承認して貰つた。

修正條項出來上り、財團法人東洋文庫理事長幣原喜重郎氏と、國立國會圖書館長金森德次郎氏との間に契約書に調印し、八月一日付を以て公表することを、二十三年十一月二十二日開催の理事會に於いて承認決定した。

前記の如く國會圖書館との契約成り、次いで八、九、十二月の間に左の人々は國會職員に移管されることとなつた。

參事、文庫長

岩井大慧

主事、文庫長補佐、資料第一係長

石黒彌致

主事、資料第二係長

田川孝三

主事補、資料第二係員

森岡康

主事、庶務係長

守田宣

主事補、庶務係員

中川みや子

用人、技術工、同上

箕輪友吉

用人、廳仕、同上

熊田信次郎

閲覧係、アルバイト

園田一龜

昭和二十三年十二月二十七日、國會圖書館運營委員會から東洋文庫現況調査報告書を徴せられ、疎開圖書の疎開場所別部冊數、並に残存在庫圖書の部冊數の報告をした。

現在書庫に残存せる分は新潟倉庫へ送るべかりしもので、主として滿、蒙、藏文の文獻である。取扱上非常に困難なりし爲め、後廻しにし來つたので残存終戦となつたのである。その外日本文の印刷物が残存していた。各個名は今略す。

疎開圖書の疎開場所別部冊數はどうなつてゐるかとの質問に對して、左の如く答えた。

宮城縣加美郡中新田町を中心とした地域に八倉庫に分置した。

1	米川倉庫	三萬二千部	四萬八千冊
2	今野倉庫	四萬三千部	五萬二千冊
3	高橋倉庫	A 六萬五千部	八萬一千五百冊
4	高橋倉庫	B 五萬二千部	六萬一千五百冊
5	下山倉庫	三萬三千部	四萬九千五百冊
6	星倉庫	A 六萬三千部	八萬三千五百冊
7	星倉庫	五千部	八千冊
8	木村倉庫	三萬五千部	五萬一千冊
八庫、合計三十二萬八千部		四十三萬五千冊	

昭和二十五年五月十三日午前十時

當文庫講堂にて東洋文化研究會議を開いた。議長仁井田陞、報告者旗田巍、古島敏雄の諸氏、午後四時より懇談會を開いた。

昭和二十五年十一月一日より七日迄、國會本館羽衣の間に於いて「音樂文化資料展覽會」が開かれ、所藏の慶長十年刊キリシタン版サカラメンタ提要を出陳した。これはわが國印行の五線音譜の最古のものである。その他若干をも出した。

昭和二十五年十一月十一日、十二日

全國史學者の集合する史學會大會が東京にて開催されるを好機に文庫所藏の朝鮮に關する文獻を展示し、時局に對

する認識を深めさせようと啓蒙的な企畫である。第一部、朝鮮自體の文獻、第二部、歐米人の朝鮮に關する研究文獻、第三部、日本の朝鮮文獻、複製、複印文獻、第四部、日本人の朝鮮研究論著、第五部、日本人の朝鮮の考古學的成果、各部門二三十部を展觀した。來觀者から喜ばれた。

昭和二十八年五月九日～十一日

戰後世界各國から收受した圖書を展示し、その展示目錄を印行した。

内外からの財政援助

嚮きに發行した東洋文庫十五年史に見られる如く、文庫はわが國に於いては稀に見る確固たる財團であり、盛時にあつては常に三十七八名の人員を擁して運営に當り、圖書部、研究部、庶務部の陣容に於いて、華々しい活動を續け、國外にも著名であつた。然るところ敗戦の結果、聯合軍の占領下に、廿一年二月十六日金融緊急措置令（新圓交換）、日本銀行券預入令（封鎖）、四月廿日會社配當等禁止制限令、八月十五日金融機關計理應急措置法、十月企業再建整備令等等、連續發令によつて、基金として所有していた株式配當金の收入皆無となり、次いで株券そのものも沒收さるるような形となり、全く假死狀態に陥り、文庫一切の機能は運営困難の狀態になつて了つた。

この窮狀を救援する爲めに昭和二十四、五年度に磯野長藏氏から各二十五萬圓宛、同二十四年度に俣野健輔氏から五十萬圓の寄附をうけた。

このような文庫の窮情を訴えて、筆者はハーヴァード・エンチン財團に書を送り援助を求めた。幸に、同所長S・エリセーフ博士と舊知であつたから。ところが同財團の目的がチャイナとチャイニーズに對するものであるから、定款變更の上でなければ出來ないとの返事であつた。併しその後昭和二十八年十一月同博士の來朝となり、研究生養成

費、研究成果印行費として左の如く援助を受けることとなつて、假死に活を入れた形となつた。

昭和二十八年七月—二十九年六月 七千五百弗

昭和二十九年七月—卅年六月 五千五百弗

昭和三十年七月—卅一年六月 七千五百弗

同じくロックフェラー財團のフアース博士を帝國ホテルに訪い、文庫への援助方を懇請した。然るところ博士は、文庫の從來の功績も十分知つてゐるし、成果もブリリアントだ。併し自分の財團が企畫しているところとは目的が違ふ、「東洋文庫の御仕事はツークラシックスで、ノンブラクチカルだ」と言われた。そこで筆者は、勿論ブラクチカルな共同研究の場をお世話する新なプランニングも既にいろいろ持つてゐるがと説明したところ、それに對して考慮しようと言うことで別れた。そこで山本達郎理事と謀り實行に移したのが近代史研究委員會の設立であり、それに對してロックフェラー財團から資金的援助を得らるに至つた経緯である。

昭和二十八年 設置準備金として 三十二萬四千円

昭和二十九年十一月一日から三十一年十月三十一日迄、圓資金五百五十七萬四千圓、弗資金一萬六千九百十ドル、圓資金は國內支出に、弗資金は研究者の海外派遣費、海外圖書購入費に當てる。

かくの如く國內民間、國外財團から寄附後援があつたのに刺戟をうけた結果、羽田亨博士が理事となられると、文部省へ實情を陳べ、研究所助成金の交付を申請、昭和三十年度以來參百八拾五萬圓の援助を受け、やゝ活潑な研究活動を復活するに至つたことは、嘗に一文庫の運営の爲めのみならず、廣くわが東洋學界の幸福と欣ばざるを得ない。

文部省の機關研究交付金はこれにとゞまらなかつた。昭和二十八年以來英國博物館所藏スタイン博士蒐集の敦煌文書のマイクロ寫眞撮影費を文庫内敦煌文書整理研究委員會（代表 岩井大慧）の爲めに四百五十萬圓、昭和二十九年

度同撮影ボジフィルムよりネガ作製費を百參十萬圓、昭和三十年度同ペーパープリント、製本費四百萬圓の援助を受けた。これによつて從來敦煌文書の研究は渡英せねば出来なかつたものが、わが國內に在つて研究することが出来るようになったのは、快事と言わねばならない。文部當局に對して深謝する次第である。

理事長の逝去

林 權 助 昭和七年五月廿八日前桐島理事長に代つて就任された男爵林權助理事長は、昭和十三年十二月頃から御病氣御引籠中だつたが、十四年六月二十七日麻布區霞町の自邸に於いて逝去された。

白 鳥 庫 吉 當文庫創立以來或時は理事長を或時は研究部長を歴任せられた白鳥庫吉文學博士は、昭和十七年三月三十日午後十時三十分、神奈川縣茅ヶ崎海岸の別荘に於いて逝去された。

清 水 澄 昭和十四年十一月二十五日就任された清水澄法學博士は、二十二年九月二十五日靜岡縣熱海市にて逝去された。博士は戰中戰後の經濟混亂時に當り、國會圖書館との契約問題など交渉に忙しい最中に亡くなられた。

幣原喜重郎 昭和二十二年十月九日就任された元男爵幣原喜重郎氏は、折しも衆議院議長の任にあつた關係上、國會圖書館への連絡交渉に盡力されたのであつたが、二十六年三月十日世田谷區岡本の自邸に於いて逝去された。

研 究 部

戰時中、或は疎開の爲め、或は應召の爲め或は戰死の爲め、或は歸還の爲め非常な人的變動があつた。

終戦直後の研究生として在籍せるものは榎一雄、矢澤利彦、白鳥芳郎の三氏のみである。昭和二十三年十一月二十二日、従来の研究員各位を研究顧問とすることと決し、なお物故者もあつて實員不足となつていたので、若干名を補充することを決め、更に數名の學者を研究員に推薦した。

研究顧問 池内宏、津田左右吉、羽田亨、原田淑人、橋本増吉、和田清（以上は従前通り）、梅原末治、藤田亮策、村田治郎（新加）

研究員 岩生成一、榎一雄、河野六郎、關野雄、末松保和、三根谷徹

昭和二十六年と三十年四月の間 研究員 山根幸夫、本田實信、田中正俊、山口瑞鳳、松村潤
矢澤利彦研究生は埼玉大學へ、白鳥芳郎研究生は上智大學へそれぞれ榮轉して退庫した。

なお十五年史發刊以後の文庫關係の退職、物故者、戰病死者等を左に掲げておく。

理事、評議員

昭和十六年八月十六日 （死）

長 與 又 郎（評）

十七年一月二十八日 //

荒木寅三郎 //

十八年二月十七日 //

平 賀 讓 //

十九年八月二十二日 //

田 中 穂 積 //

十九年十二月十七日

〃

一木喜徳郎

〃

廿五年十月九日

〃

池田成彬

〃

廿七年二月七日

〃

坂本正治(理)

廿八年四月十三日

〃

羽田亨

〃

廿七年十一月十九日

(退)

内田祥三(評)

廿七年十一月十九日

〃

深井三男(監)

研究員

昭和廿一年三月七日

(死)

加藤 繁

廿七年十一月一日

〃

池内 宏

文庫員並に傭員、

昭和一一、四、二六、茂泉佐(寫眞、應召戰死) 一五、七、二七、村上タケ(交換手、退) 一五、一一、一二、

高木菊松(闊覽、退) 一六、三、八、野村初子(交換手、退) 一六、四、一〇、服部一枝(洋目、退) 一六、

五、一七、宇佐美ふみ(庶、退) 一六、一〇、一、加藤正明(闊覽、退) 一六、一〇、二五、久保知子(タイピス

ト、退) 一六、一一、二五、北島松太郎(庶務、退) 一七、五、二三、出石誠彦(研事、死) 一七、五、三〇

木村光孝(西藏目、戰死) 一七、八、一、中村淑子(洋目、退) 一八、二、二三、五十嵐梅三郎(漢目、退後

死) 一八、九、三〇、前田勝太郎(洋目、退) 一八、一一、三〇、石田正憲(闊覽、退) 一九、六、三〇、藪

中靜雄(洋目、退) 一九、六、三〇、中條龍(洋目、退) 一九、七、一五、林徳子(和目、退) 一九、七、一

五、中島正之(闊覽、退) 一九、八、二五、岩澤太郎(闊覽、退) 一九、八、二五、杉山とし(庶務、退) 一

九、九、二五、菊池ミツエ（庶務、退） 一九、九、三〇、五十嵐笑子（庶務、退） 二〇、一、二九、竹村美佐子（庶務、退） 二〇、二、六、金指かね子（和漢目、退） 二〇、二、二、金澤達子（庶務、退） 二〇、三、二六、行弘ミツ（庶務、退） 二〇、四、二六、太田久子（タイピスト、退） 二〇、五、一九、駒井義明（洋目、退） 二〇、七、三〇、堀七三郎（闊覽、死） 二〇、八、一六、藤岡信一郎（洋目、退） 同、東海三郎（洋目、退後死） 同、樋口慶千代（和漢目、退後死） 二〇、八、一六、藤田笑子（洋目、退） 二〇、五、一六、笠松單傳（闊覽、戰病死） 二〇、八、一九、久野昇一（和漢目、應召、除隊後病死） 二〇、九、二九、小平滿江（和目、退） 白井多美子（和目、退） 二二、一二、一、山崎欽應（漢目、退） 二二、一二、二四、牟田節子（庶務、退） 二二、二、三、鈴木英（庶務、會計、死） 二二、三、二五、前田幸太郎（庶務、會計、退後死）

研究部事業

公開講演（昭和十四年度春期分までは既刊東洋文庫十五年史に載せてある）

昭和十四年度

秋 期 自十一月二日至十二月七日 自午後六時至午後八時 毎木・金曜 六回

第五十二回 十一月二日（木）九日（木）

蒙古及び突厥兩民族の起原

研究部長東大名譽教授 白鳥庫吉

第五十三回 十一月十六日（木）廿四日（金）

支那主要産業の發達について

研究員東大教授 加藤 繁

第五十四回 十一月廿日(木) 十二月七日(木)

日本美術と支那美術

美術研究所長 矢代幸雄

昭和十五年度

春 期 自六月六日至六月廿日 自午後六時至午後八時 四回

第五十五回 六月六日(木) 七日(金)

遼金時代の建築

京大教授 村田治郎

第五十六回 六月十三日(木) 廿日(木)

李鴻章とその時代

研究員東大教授 和田清

秋 期 自十月廿四日至十一月廿八日 自午後六時至午後八時 六回

第五十七回 十月廿四、卅一日、十一月七日(木)

支那歴代板本の特徴

東大講師 長澤規矩也

第五十八回 十一月十四、廿一日(木)

漢初の思想

研究員慶大教授 橋本増吉

第五十九回 十一月廿八日(木)

落花生の支那移植年代について

文庫主事 岩井大慧

昭和十六年度

春 期 自五月十五日至七月三日 自午後六時至午後八時 八回

第六十回 五月十五、十六日(木、金)

南洋日本人發展史

臺北帝大教授 岩生成一

第六十一回 五月廿九日(木)

東京及び北安南に於ける銅鼓

印度支那連東學院教授 ビクトール・ゴルービエフ

第六十二回 六月五、十二、十九日(木)

漢魏時代に於ける樂浪郡と其の郡治及び屬縣

研究員東大名譽教授 池内宏

第六十三回 六月廿六日、七月三日(木)

間島、牡丹江兩省に於ける渤海遺蹟調査

京城帝大教授 鳥山喜一

秋 期 自十月三十日至十一月廿七日 自午後六時至午後八時 七回

第六十四回 十月三十日、十一月六日(木)

殷初史傳の批判

研究員 出石誠彦

第六十五回 十一月十三、十四、十五日(木、金、土)

六朝駢文史大要

京大名譽教授 鈴木虎雄

第六十六回 十一月廿、廿七日(木)

儀禮及び禮記に於ける家族と宗教

東方文化學院研究員 牧野巽

昭和十七年度

春 期 自五月廿八日至六月十八日 自午後六時至午後八時 五回

第六十七回 五月廿八日(木) 廿九日(金)

章學誠——其人と其學

東北帝大教授 岡崎文夫

第六十八回 六月四日、十一日(木)

唐代の蕤荪國について

研究生一高教授 榎 一 雄

第六十九回 六月十八日(木)

モン民族に關する歴史的研究——特に Dvaravati——

東大助教授 山 本 達 郎

秋 期 自十月八日至十一月廿七日 自午後六時至午後八時 八回

元當文庫理事研究部長白鳥庫吉博士の追悼記念講演會として文庫員總員にて研究發表をした。同時に記念展覽會を開き、目錄を頒布した。

第七十回 十月八日(木)

唐代に於ける西域の理想郷

研究生一高教授 榎 一 雄

第七十一回 十月十五日(木)

周代の蠻貊について

研究員東大教授 和 田 清

第七十二回 十月廿二日(木)

南宋の再造と都督張浚

研究員 加 藤 繁

第七十三回 十月廿九日(木)

禮記の月令について

研究員 橋 本 増 吉

第七十四回 十一月五日(木)

シナに於いて無量壽佛の名の用ひられたことについて

研究員 津 田 左 右 吉

第七十五回 十一月十二日(木)

食物本草について

主事 岩井大慧

第七十六回 十一月十九日(木)

山東省曲阜の發掘

研究員 東大教授 原田淑人

第七十七回 十一月廿七日(金)

支那民族の保守性と同化性の再檢討

研究員 京大總長 羽田亨

昭和十八年度

春 期 自六月三日至七月二日 自午後六時至午後八時 八回

第七十八回 六月三、四日(木、金)

考古學上より見たる北部佛印の古代文化

京大教授 梅原末治

第七十九回 六月十、十七、廿四日(毎木曜)

論語の成立について

研究員 津田左右吉

第八十回 七月一日(木)

黃承吉とその小學說

東大・京大教授 倉石武四郎

第八十一回 七月二日(金)

成吉思汗の即位と巫覡

主事 岩井大慧

秋 期 自十月七日至十一月二十五日 自午後六時至午後八時 八回

第八十二回 十月七、十四日(木)

匈奴に關する二三の問題

民族研究所研究員 江上波夫

第八十三回 十月廿八日(木) 廿九日(金)

清朝法制史料解題

建國大學教授法博 瀧川政次郎

第八十四回 十一月四、十一、十八、二十五日(毎木曜)

支那經濟史雜考

研究員文博 加藤 繁

昭和十九年度

春 期 自五月十日至五月廿五日 自午後四時至午後六時

第八十五回 五月十日(水) 十一日(木)

支那に於ける貞操神判の一形式

學習院教授、亞細亞文化研究所長 白 鳥 清

第八十六回 五月十七日(水) 十八日(木)

中世ペルシャの新年とその習俗の東方傳播

研究生一高教授 榎 一 雄

第八十七回 五月廿四日(水) 廿五日(木)

西南支那の開発に就いて

東大教授文博 和 田 清

秋 期 自十月十一日至十月廿六日 自午後四時至午後六時

第八十八回 十月十一日(水) 十二日(木)

宋代の大秦國に就いて

研究生一高教授 榎 一 雄

第八十九回 十月十八日(水) 十九日(木)

漢蒙交界地方に於ける農牧限界線の移動とその地理的意義

東大助教授理博 多 田 文 男

第九十回 十月二十五日(水) 二十六日(木)

莊子の知

東方文化學院研究員 板野長八

昭和二十年春より内地空襲熾烈となり、燈火管制の爲め夜間の講演は開けなくなり、已むを得ず休講とす。
終戦後文庫再開し、講演も復活した。

第九十一回 昭和二十四年十月十三日

輓近佛國に於ける東洋學研究の狀況と成果

佛國立博物館總裁
日本學士院會員
ルネ・グルッセ博士

第九十二回 昭和二十五年十月十日(金) 午後一時半〜四時

ホラズム遺蹟發掘の成果

ハーヴァード・エンチン
・インスチテュート所長
エス・エリセーフ博士

エフタル民族の起源

研究員 榎一雄

庫内談話會

昭和十四年度

第二十二回 一月二十八日(土)

梅松論について

文庫員 五十嵐梅三郎

北支滿鮮旅行談

文庫研究庶務 出石誠彦

第二十三回 三月二十五日(土)

清祖發祥の地域について

研究員 和田清

米國に於ける東洋學の現状

百瀬弘

第二十四回 五月二十日(土)

嘉靖十年の天主教禁壓

四始五際の思想について

第二十五回 十月二十六日(木)

支那旅行談

昭和十五年度

第二十六回 二月三日(土)

Kirghiz-Kaizaks の社會

儒教影響の一面

第二十七回 五月二十五日(土)

五行説の起源を論ず

西藏大藏經について

第二十八回 七月二十日(土)

高句麗の官位制度について

昭和十六年度

第二十九回 一月十八日(土)

滿洲旅行談

Kašigar-Tašikurgan

研究生 一高教授 榎 一 雄

研究生 矢澤 利彦

文庫員 久野 昇 一

研究生 矢澤 利彦

文庫員 樋口 慶千代

研究生 橋本 増吉

文庫員 笠松 單傳

研究生 矢澤 利彦

研究生 和田 清

研究生 榎 一 雄

第三十回 三月二十二日(土)

漢室再受命の思想に就いて

元の銭金經箱の銘文について

第三十一回 六月七日(土)

武内氏の「論語の研究」について

滿支耶蘇教史關係新著三四

第三十二回 十月四日(土)

支那旅行談

第三十三回 十二月十三日(土)

難兜國についての考

昭和十七年度

第三十四回 一月三十一日(土)

漢詩に據る芭蕉の俳味

第三十五回 四月十一日(土)

辛酉革命説について

第三十六回 九月十九日(土)

滿洲を三韓と稱することについて

昭和十八年度

文庫員 久野昇一

研究員 原田淑人

研究員 津田左右吉

研究生 矢澤利彦

研究員 和田清

研究生 榎一雄

文庫員 樋口慶千代

文庫員 久野昇一

研究員 和田清

第三十七回 四月十日(土)

巫と成吉思汗の即位

主事 岩井大慧

第三十八回 五月二十九日(土)

不明の二地名 Sarag-madu

研究生 榎一雄

漢書翼奉傳に見えたる太陰について
成都の大秦寺について

文庫員 久野昇一
研究生 榎一雄

第三十九回 九月二十五日(土)

侏儒考

研究生 和田清

第四十回 十二月十一日(土)

海青牌のアラビア文字銘文

研究生 榎一雄

滇王莊躋故事

研究生 和田清

昭和十九年度

第四十一回 二月二十六日(土)

尙書考靈緯について

文庫員 久野昇一

第四十二回 四月二十二日(土)

竹書紀年の製作年代

研究生 橋本増吉

第四十三回 九月十六日(土)

清末の教案について

研究生 和田清

第四十四回 十二月九日(土)

チベットの名稱について

研究生 榎 一 雄

昭和二十年に入つて戦禍内地に及び開催困難となり中止す。

昭和二十六年

第四十五回 一月三十日

建州左衛の位置について

園 田 一 龜

第四十六回 三月二十三日

世界史より見たる日本

和 田 清

第四十七回 四月十七日

「天朝田畝制度」の成立年代について

市 古 宙 三

第四十八回 六月五日

天草本羅葡日辭典の複製について

岩 井 大 慧

第四十九回 十月九日

眞番郡の位置について

末 松 保 和

第五十回 十一月二十日

通文館志の編纂について

田 川 孝 三

昭和二十七年

第五十一回 一月二十九日

中古中國語の歌(戈)韻について

三 根 谷 徹

第五十二回 二月十二日

西藏藏經の版種について

壬 生 台 舜

第五十三回 二月十二日

イギリス及び歐洲における最近のシナ學の發展

E・G・ブリーイブランク

第五十四回 三月十八日

オランダ史料から見た日支貿易

岩 生 成 一

第五十五回 三月十八日

清初蘇州の字號經營

田 中 正 俊

第五十六回 四月十五日

鄯善國の官制と漢書西域傳の性質

榎 一 雄

第五十七回 五月二十四日

支那の誕生日について

和 田 清

第五十八回 六月二十一日

オランダ東印度會社の遣支使節について

岩生成一

第五十九回 九月二十日

チンギス汗の千戸について

本田實信

第六十回 十月十八日

古代中國の尺度について

關野雄

第六十一回 十一月二十二日

最古刊本マルコ・ポーロ東方見聞録

岩井大慧

第六十二回 十二月二十日

高麗の兩班の起源について

末松保和

昭和二十八年

第六十三回 二月二十一日

在外研究報告

山本達郎

第六十四回 三月二十八日

殷墟並に印度支那の發掘について

梅原末治

第六十五回 四月十八日

唐代音の鼻頭音について

河野六郎

第六十六回 五月十六日

明正統期の銀山再開をめぐる官僚と礦賊

田中正俊

第六十七回 六月二十日

東南アジアの言語に關する最近の研究

三根谷徹

第六十八回 七月十八日

甲骨文について

橋本増吉

第六十九回 九月十九日

安南王のオランダ東印度會社宛援兵懇請狀について

岩生成一

第七十回 十月十七日

初期李朝の貢物について

田川孝三

第七十一回 十一月二十一日

殷朝生産の基盤

關野雄

昭和二十九年

第七十二回 一月二十三日

渤海國地理考

和田清

第七十三回 二月二十日

唐蕃會盟碑研究について

壬生台舜

第七十四回 三月十三日 ミリングパンハについて

第七十五回 四月十七日 新羅の奈勿王について

第七十六回 五月二十二日 諺文について

第七十七回 六月二十六日 古代チベット紀年の錯誤について

第七十八回 九月十八日 兀惹考

第七十九回 十月十六日 邪馬臺國と日本の建國

第八十回 十一月二十七日 明末蘇州の二民變について

第八十一回 十二月十八日 華北における廟會について

昭和三十年

第八十二回 一月二十二日 明史西域傳手闡考

第八十三回 三月十九日 竹島について

石黒彌致
末松保和

河野六郎

青木文教

和田清

榎一雄

田中正俊

山根幸夫

松村潤

田川孝三

出版刊行物

東洋文庫出版物はA、B、C、D、E、のシリーズから成立っている。さきの十五年史所載のもの以後、この期間非常時困難な事情下にあつて出版されたものは左の如くである。

A 東洋文庫論叢（邦文）

番號 書名

第二九 支那古代曆法史研究

冊數 年次 版型 著者

一 昭一八 A五 橋本増吉

第三〇	異譯經類の研究	一	昭二〇	A五	林屋友次郎
第三一	明代建州女直史研究	二	昭三、元	A五	園田一龜
第三二	日清戰役外交史の研究	一	昭二六	A五	田保橋 潔
第三三	ブラーフマナとシュラウタスートラとの關係	一	昭二七	B五	辻 直四郎
第三四	支那經濟史考證	二	昭二八	A五	加 藤 繁
第三五	本生經類の思想史的研究	一	昭二九	A五	千 潟 龍 祥
第三六	新羅史の諸問題	一	昭二九	A五	末 松 保 和

B 東洋文庫歐文紀要 Memoirs of the Tōyō Bunko (Oriental Library).

No. 11. (1939)

K. Shiratori, The Mu-nan-chu 木難珠 of Ta-ch'in 大秦 and the Cintāmaṇi of India.

Y. Harada, The Interchange of Eastern and Western Cultures as Evidenced in the Shōsōin Treasures.

N. Niida, A Study of Simplified Seal Marks and Finger-Seals in Chinese Documents.

No. 12. (1940)

S. Ogura, The Outline of the Korean Dialects.

No. 13. (1951)

K. Shiratori, The Santan 山丹 in the *Tōtatsu-Kōhō*, 東鑑紀行.

H. Iwai, The Compilers of the Ching-tu-pao-chu-chi 淨土寶珠集.

N. Egami, The K'ua-ti 馱駝, the Tao-yu 駟駝 and the Tan-hsi 驢騾, the strange domestic animals of the Hsiung-nu 匈奴.

C 東洋文庫叢刊

番號	書名	冊數	年次	版型	解說者
第一	同慶御覽地輿諸圖	二	昭一八	A五	山本達郎
第二	古鮮冊譜(第一冊)	一	昭一九	B五	前間恭作編

1. Marco Polo : The first Latin Edition, beginning with : In nomine dñi nrì ihu xpi filij dei viui et veri amen. Incipit plogus i libro dni marci pauli de venecijs de ccsuetudinibus et cõdicionobuso rientaliũ regionũ. Gerard Leeu, Antverpiæ. 1485. 4°. The Gothic type, 74 sheets or 148 pages, non title, no pagination. 33 lines each, without catchwords. A Facsimile Reproduction of the Original edition, with a booklet entitled "Manuscripts and Printed Editions of Marco Polo's Description of the World" by Prof. Shinobu Iwamura, pp. 23. 1948. [cf. Cordier, B. J. Col. 13.]

2. Dictionariũ Latino Lvsitanicvũ, ac Iaponicvũ ex Ambrosii Calepini vluimine depromptum in Amacvsa in collegio Japonico Societatis Iesv cum facultate Superiorum. Anno M. D. XCV. 4°. pp. 908. A Facsimile Reproduction of Original edition in possession of the

Pei-t'ang Library of the Lazarist Church, Peking, China. With introductory note in Japanese by Prof. H. Iwai. 1951-53 [*cf.* E. Satow, p. 27; Pages, no. 54; Cordier, col. 192-3; Streit, V. p. 541; Sommervogel, IX, col. 1524-5.]

3. Historia del regno di Voxu del Giapone, dell' antichita, nobilita, e valore del svo re Idate Msamvne, delli favori, c'ha fatti alla christianita, E dell' Ambasciata che hà inuiata alla Sta, di N. S. Papà Paolo V. Scipione Amati. Roma. M. DC. XV. 4°. pp. 76. A Facsimile Reproduction of the Journal of the second private Ambassador from Japan to Rome, with 2 plates, reproduced from two German editions and 3 appendices in pp. 12 of a minimized reproduction of three "Relacione" (1614, 15 and 61) written by Luis Sotelo, Franciscan Father, etc. and an Introductory note by Prof. H. Iwai and Prof. Y. Okamoto. 1953. [*cf.* Pages, B. J. no. 131; Cordier, col. 283; Streit, 1126] minimized reproduction.

D 東洋文庫論叢 (圖文) Monographs in European languages.

3. Takahata Kanga 高畠寛我 Bonbun Daijō-Hōman-Hiyu-Kyō 梵文大乘寶鬘譬喻經. The Ratnamālāvādāna. A Garland of precious gems of a collection of Edifying Tales told in a Metrical form, belonging to the Mahāyāna. 1 vol.; 8°. pp. 495: 1954.

E 東洋文庫諸目錄

東洋文庫朝鮮本分類目錄 附安南本目錄

一 昭一四 B五

白鳥博士記念展覽會陳列圖書目錄

一 昭一七 A五

東洋文庫漢籍叢書分類目錄

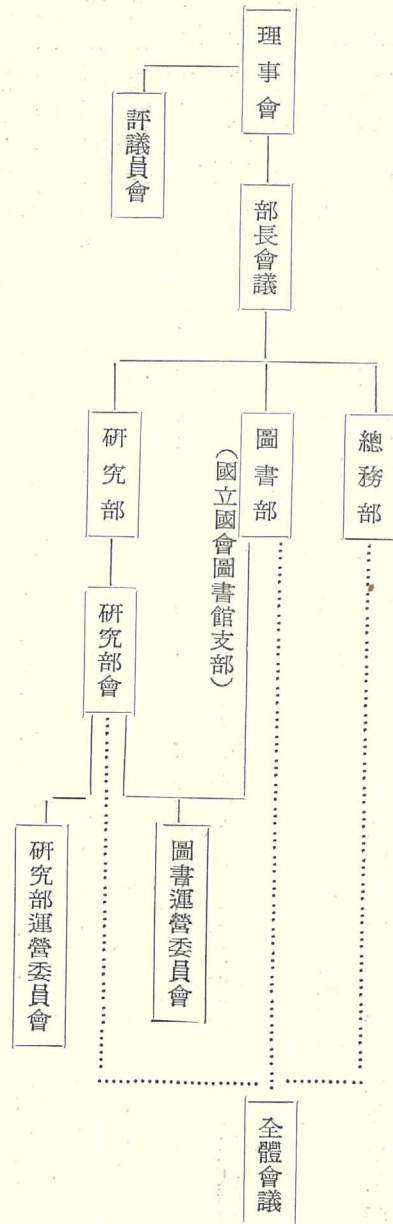
一 昭二〇 B五

A Classified Catalogue of Books in the Tōyō Bunko. Vol. I; Section I. General Reference Works. Section II. Asia, and the Pacific. (1917-36). 1 vol. 4°. pp. xix, 402. 1944.

A Classified Catalogue of Books in European Languages in the Tōyō Bunko. Vol. IV; Section XII. India. (1917-1950). 2 vols. 4°. pp. (X, 288, xviii), (2, 116). 1950-1952.

A Catalogue of Post War Acquisitions Exhibited in the Tōyō Bunko, May 9, 10, 11, 1953. pp. 70. 1953.

二 組 織



財団法人 東洋文庫 附行 爲

第一章 名 稱

第一條 本財団法人は財団法人東洋文庫と稱す

第二章 目的及事業

第二條 本財団法人は東洋に關する圖書を蒐集し東洋學の研究及其普及を圖るを目的とす

第三條 本財団法人は前條の目的を達する爲左の事業を行ふ

一 文庫の設置經營

二 研究部の設置經營

三 講演會講習會展覽會の開催

四 有益なる圖書の出版

五 其他評議員會の決裁に依り必要と認めたる事項

第三章 事務所

第四條 本財團法人は事務所を東京都文京區駒込上富士前町百四十七番地に置く

第四章 資産及會計

第五條 本財團法人の資産左の如し

一 基本財産

二 本財團法人設立者及有志の寄附金

三 圖書其の他の動産

四 第一號及第二號の財産より生ずる果實

五 雜收入

第六條 本財團法人の資産は評議員會の決議したる方法に依り理事長之を管理す

第七條 基本財産は之を處分することを得ず 但し財團法人の目的遂行上基本財産の處分を必要とするときは評議員四分の三以上の同意を得且主務官廳の認可を受けることを要す

第八條 本財團法人の經費は第五條第二號第四號並に第五號の收入及前年度繰越金を以て之を支辨す

第九條 毎會計年度の終に於て剩餘金ある時は之を基本財産に編入す 但し一部に限り之を翌年度に繰越すことを得

第十條 本財團法人の豫算は毎年度評議員會の決議を経て之を定め決算は其の認定を経べきものとす

第十一條 本財團法人の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第五章 解 散

第十二條 本財團法人解散するに至りたる時は理事は豫め評議員會の決議を経且主務官廳の認可を得て殘餘財産を同様目的を有する官公立又は私立の團體に寄附して本財團法人の設立の目的を永遠に繼續せしむることを圖るべし

第六章 役 員

第十三條 本財團法人に理事五名以上七名以内監事二名以内及評議員若干名を置く

第十四條 理事及監事は評議員會に於て評議員中より之を互選す

第十五條 理事中に理事長一名を置き別に専務理事一名を置くことを得

理事長及専務理事は理事の互選に依る

理事長は本財團法人を代表し其事務を統轄し會議の議長となる

専務理事は理事長を補佐し本財團法人の事務を掌理し理事長故障ある時は其の職務を代理す

第十六條 理事及監事に缺員を生じたる時は評議員會を開き補缺選舉を行ふ 但し理事會に於て事務に支障なしと認むるときは延期することを得

第十七條 評議員は理事會の決議により之を推薦す

第十八條 役員任期は四ヶ年とす 但し再任を妨げず 役員補缺者の任期は前任者の殘任期間とす 役員は任期満

了後と雖後任者就任する迄其の職務を行ふ

第七章 會 議

第十九條 理事會は理事長之を招集し理事三名以上の出席を以て成立し議事は其の過半數の同意に依りて決定す

第二十條 評議員會は理事長之を招集し毎年一回之を開く 但し理事に於て必要と認めたる時は臨時之を招集することを得 監事又は評議員の三分の一以上より會議の目的たる事項を示して請求をなしたる時は評議員會を開くことを要す

第二十一條 評議員會の取締權限左の如し

一 歳入決出豫算を定むること

二 決算の認定に關すること

三 役員を選擧すること

四 本寄附行爲を變更すること

五 其他理事に於て必要と認め附議したる事項に就き審議すること

第二十二條 評議員會は評議員三分の一以上の出席を以て成立し議事は其の過半數の同意に依りて決す 可否同數なる時は議長之を決す 但し第二十一條の寄附行爲の變更に就きては評議員三分の二以上の出席を要す

第八章 附 則

第二十三條 本寄附行爲は理事會及評議員會の決議を経主務官廳の認可を得て之を變更することを得

三 職 員

理事長 細川護立 (文化財保護委員)

理事 和田清 (日本學士院會員 東京大學名譽教授)

有光次郎 (元文部次官)

德川宗敬 (元參議院議員)

小倉正恒 (元大藏大臣)

澁澤敬三 (元大藏大臣)

山本達郎 (東京大學教授)

監事 岡東浩 (東山農事常務取締役)

評議員 小泉信三 (日本學士院會員 元慶應大學總長)

新村出 (日本學士院會員 京都大學名譽教授)

磯野長藏 (明治屋本店社長)

俣野健輔 (飯野海運社長)

島田孝一 (元早稻田大學總長)

潮田江次 (元慶應大學總長)

高橋龍太郎 (元通產大臣)

矢内原忠雄 (東京大學總長)

石 黒 俊 夫 (三菱地所會社會頭)

梅 原 末 治 (京都大學教授)

總務部 (部長)

中 尾 方 一

勝 間 勇 次 郎

熊 田 信 次 郎

丸 龜 美 貴 子

圖書部 (部長)

箕 輪 友 吉

岩 井 大 慧

石 黒 彌 致

宇 都 木 章

田 川 孝 三

森 岡 康

園 田 一 龜

和 田 清 (日本學士院會員 東京大學名譽教授)

岩 生 成 一 (東京大學教授)

榎 一 雄 (東京大學教授)

河 野 六 郎 (東京教育大學助教授)

末 松 保 和 (學習院大學教授)

關野 雄（東京大學助教授）

田中正俊（橫濱市立大學助教授）

本田實信

松村 潤

三根谷 徹（東京大學助教授）

山口瑞鳳

山根幸夫

山本達郎（東京大學教授）

四 入庫圖書 (三〇・四・三一・三)

和漢書 單行本

書 名

著 者

發 行 所

年

世界美術全集(二九冊)	平 凡 社 編	平 凡 社	一九五
明治文化史第四 思想・言論編	高坂正顯編	開國百年文化事業會	一九五
臨濟錄の序者郭天錫について(抜刷)	陸 川 堆 雲	弘 文 堂	一九五
池田素遊戲句鈔	池 田 素 遊	侗 笛 庵	一九五
考古圖編第十四輯	東京大學考古學研究室編	東 京 大 學	一九五
元朝秘史の研究	小林高四郎	日本學術振興會	一九五
森永五十五年史	森永五十五年史編輯委員會編	森永製菓株式會社	一九五
古代研究(歷史學研究報告第三集)	東京大學教養學部人文科學紀要第五	東京共立出版株式會社	一九五
武藏野の青石塔婆 (東京都文化財調査報告第二集)	稻 村 坦 元	東京都教育委員會	一九五
國寶圖錄 第三集	文化財保護委員會編	文 化 財 協 會	一九五
日本統計年鑑 昭和二十九年—第六回—	總理府統計局編	日 本 統 計 協 會	一九五
靜 嘉 錄	靜嘉錄編纂委員會編	川崎大師平間寺	一九五
史料編纂所圖書目錄——和漢書刊本篇——	東京大學史料編纂所編	東京大學出版會	一九五

慈雲尊者全集

慈雲尊者百五十年遠忌奉贊會編

慈雲尊者百五十年遠忌奉贊會 一九五五

楓の蔭

ソ連對日外交の分析

藤楓協會編
片岡貢

藤楓協會
民主日本協會 一九五五

鎌倉國寶館圖錄第一集—彫刻篇(1)—

澁江二郎

鎌倉市教育委員會 一九五三

鎌倉國寶館圖錄第二集—彫刻篇(2)—

澁江二郎

鎌倉市教育委員會 一九五四

京都府文化財調查報告 第二十一冊

京都府教育委員會編

京都府教育委員會 一九五五

譬喻 盡—四—

高羽五郎

高羽五郎 一九五五

米船モリソン號渡來の研究—天保八年—

相原良一

野人社 一九五四

唐代の行政地理

平岡武夫

京都大學人文科學研究所 一九五五

東京電業懇話會二十五年史

東京電業懇話會編

東京電業懇話會 一九五五

天草本平家物語 卷二、三(二冊)

井上章

井上章 一九五五

學術上の東洋西洋上、下(二冊)

三宅雪嶺

實業之世界社 一九五四

正倉院展目錄

奈良國立博物館編

奈良國立博物館 一九五五

稀觀本集—開館二十五周年記念—

天理圖書館編

天理大學出版部 一九五五

日本の辭書展示會—目錄と解説—

國立國會圖書館編

國立國會圖書館 一九五五

度會神道大成—後篇 大神宮叢集—

神宮司廳編

神宮司廳 一九五五

春及廬詩藁

永富撫松(今田哲夫譯)

鹿島守之助 一九五五

肇論研究

中文地志目錄

記念論文集——中央大學七十周年——

中國に於ける景教衰亡の歴史

東洋史學論集第四

日本農業發達史 第五、六、七卷 (三冊)

內閣制度七十年史附錄 (二冊)

總合研究報告集錄人文編 昭和二八年度

各個研究および助成研究報告集錄
哲、史、文編 昭和二九年度

七十年史序編 本編 (二冊)

清代大運河漕運の地域的考察

科學研究費報告集錄 社會科學編 昭和二八年度

ロザリオの經 (翻譯篇Ⅰ) (二冊)

藏品目錄

新日本大觀

幣原喜重郎

昭和財政史 第三、四卷 (二冊)

世界歴史事典第二、二四、二五卷 (三冊)

塚本善隆

天理圖書館編

吹田順助編

佐伯好郎

東京教育大學東洋史學研究室編

日本農業發達史調查會編

內閣官房編

日本學術振興會編

哲史文學現況調查委員會編

社史編纂委員會編

海野一隆

日本學術振興會編

高羽五郎

東京藝術大學編

新日本大觀編集委員會編

幣原平和財團編

大藏省昭和財政史編集室編

平凡社編

法藏館

天理大學出版部

中央大學

ハーバード燕京同志社

不昧堂書店

中央公論社

大藏省印刷局

日本學術振興會

哲史文學現況調查委員會

日本セメント株式會社

大阪學藝大學

日本學術振興會

高羽五郎

東京藝術大學

毎日新聞社

幣原平和財團

東洋經濟新報社

平凡社

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

一九五五

中國古代史概論

東南アジア大陸諸民族の親族組織

特許制度七十年史

法制局意見年表 第二卷

戰後五年中國關係圖書目錄(二冊)

水野家文書目錄

越中産紙手鑑

佛教大辭典 第二卷 コーシ 増訂

漢代社會經濟史研究

佛教大辭典 第三卷

祖 州 城

蔣 介 石

地藏菩薩立像

日本に残存せる中國近世音の研究

大日本分縣地圖併地名總覽

朝鮮醫學史及疾病史

訪 書 餘 錄

宮 崎 市 定

大 林 太 良

特 許 廳 編

法 制 局 編

國立國會圖書館一般考查部編

東京都立大學附屬圖書館編

上村 六郎・吉田 桂介

望月 信亨 増訂 塚本 善隆

宇都宮清吉

望 月 信 亨

島 田 正 郎

董 顯 光

堀 口 蘇 山

飯 田 利 行

國際地學協會編

三 木 榮

和 田 維 四 郎

ハーパー下燕京同志社 一九五五

東京大學東洋文化研究所 一九五五

發 明 協 會 一九五五

法 制 局 一九五三

國立國會圖書館 一九五〇

東京都立大學附屬圖書館 一九五五

和 紙 研 究 會 一九五五

世界聖典刊行協會 一九五五

弘 文 堂 一九五五

世界聖典刊行協會 一九五五

金 洋 社 一九五五

藝苑巡禮社 一九五五

飯田博士著書刊行會 一九五五

統 正 社 一九五五

弘 文 莊 一九五五

一 九 五 三

金文叢攷(三冊)	郭沫若	人民出版社	一九五五
奴隸制時代	郭沫若	人民出版社	一九五五
青銅時代	郭沫若	人民出版社	一九五五
中國古代社會研究	郭沫若	人民出版社	一九五五
十批判書	郭沫若	人民出版社	一九五五
石鼓文研究	郭沫若	人民出版社	一九五五
殷周青銅器銘文研究	郭沫若	人民出版社	一九五五
回民起義(中國近代史資料叢刊四)(四冊)	中國史學會主編	神州國光社	一九五三
戊戌變法(中國近代史資料叢刊八)(四冊)	中國史學會主編	神州國光社	一九五三
義和團(中國近代史資料叢刊九)(四冊)	中國史學會主編	神州國光社	一九五三
太平天國(中國近代史資料叢刊二)(六冊)	中國史學會主編	神州國光社	一九五三
捻軍(中國近代史資料叢刊三)(四冊)	中國史學會主編	神州國光社	一九五三
吐魯番考古記	黃文弼	新華書店	一九五五
中華人民共和國憲法	嚴靈峯	人民出版社	一九五五
老子章句新編纂解	賴家度·李光璧	臺北中華文化出版事業委員會	一九五五
明朝對瓦剌的戰爭	袁家驊	華東人民出版社	一九五五
阿細民歌及其語言(語言學專刊第五種)	袁家驊	中國科學院	一九五三
一九五二年僮族語文工作報告(語言學專刊)	袁家驊·韋慶穩·張鑒如	中國科學院	一九五三

關中方音調查報告（語言學專刊 第六種）

吐魯番考古記（考古學特刊 第三號）

中國文字拼音化問題——中國語文叢書——

國內少數民族語言文字的概況

拼音文字和漢字的比較

論 漢 語

中國文字改革問題

漢字的起原發展和改革

漢字的整理和簡化

中國文字拼音化問題

粵 音 韻 彙

漢語語法論文集

殷虛文字綴合

論 語 疏 證

中國分省地圖

長沙出土楚漆器圖錄

東京通志 一四卷

中國年畫發展史略

白 濰 洲 遺 稿

黃 文 弼

中國語文雜誌社編

中國語文雜誌社編

中國語文雜誌社編

彭 楚 南 譯

鄭 林 曦 他

高 元 白

中國語文雜誌社編

中國語文雜誌社編

黃 錫 凌

呂 叔 湘

中國科學院考古研究所編

楊 樹 達

大中書局編

商 承 祚 編

崔 浚 外

阿 英

中國科學院 一九五四

中國科學院 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

五十年代出版社 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

中華書局 一九五四

科學出版社 一九五五

科學出版社 一九五五

科學出版社 一九五五

大中書局 一九五五

上海出版公司 一九五五

新華書店 一九五四

長沙仰天湖出土楚簡研究

唐代彫塑選集

董方立遺書（八冊）

市民謄錄乾

市民謄錄坤

僞楚錄輯補

中國史綱上古篇

中國古代宗族移殖史論

先秦史

春秋史

諸子通考

詞詮

殷墟發掘

敦煌曲校錄

古代疾病名候疏義

詩詞曲語辭匯釋 上冊

詩詞曲語辭匯釋 下冊

中國繪畫史上冊

史樹青

王子雲

董祐

群聯出版社 一九五五

新華書店 一九五五

一八六九

朱希祖

正中書局 一九五五

張蔭麟

正中書局 一九五三

劉節

正中書局 一九四八

呂思勉

開明書店 一九四七

童書業

開明書店 一九四七

蔣伯潛

正中書局 一九五三

楊樹達

中華書局 一九五五

胡厚宣

學習生活出版社 一九五五

任二北校

上海文藝聯合出版社 一九五五

余雲岫

人民衛生出版社 一九五五

張相

中華書局 一九五五

張相

中華書局 一九五五

俞劍華

商務印書館 一九三七

中國繪畫史下冊	俞劍華	商務印書館	一九三七
漢書窺管	楊樹達	科學出版社	一九三五
元代白話碑集錄	蔡美彪	科學出版社	一九三五
積微居小學述林	楊樹達	中國科學院	一九五四
樂府詩集(一二冊)	郭茂倩	新華書店	一九五五
秦漢的方士與儒生	顧頤剛	上海圖書發行公司	一九五五
敦煌曲子詞集	王重民	新華書店	一九五四
敦煌變文彙錄	周紹良	新華書店	一九五四
水滸後傳(二冊)	陳紹良	寶文堂書店	一九五五
敦煌藝術敍錄	謝稚柳	新華書店	一九五五
水經注	鄭道元撰	新華書店	一九五五
金魚家化史與品種形成的因素	陳棣	科學出版社	一九五五
中國古代陶塑藝術	秦廷棧	新華書店	一九五五
譚嗣同真蹟	文操	新華書店	一九五五
維吾爾民間故事	周彤	新華書店	一九五四
中國古典文學論集	羅根澤編	五十年代出版社	一九五五
西域地名	馮承鈞編	新華書店	一九五五
中國古代雕塑集	劉開渠編	新華書店	一九五五

古代裝飾花紋選集

中國造紙用植物纖維圖譜

芮金富刻紙集

河套人

泲水之戰

根治黃河水害開發黃河水利

四松堂集

春柳堂詩稿

華東新石器時代遺址

續殷曆譜

秦會要訂補

明代海外貿易簡論

漢史初探

東周列國志上·下 (二冊)

桑園讀書記

懋齋詩鈔

魏晉南北朝史論叢

西北歷史博物館編

喻誠鴻·李雲

江蘇美術工作室·江蘇人民出版社編

賈蘭坡

李季平

中華人民共和國水利部編

敦誠

張宜泉撰

尹煥章編

嚴一萍

徐復

張維華

安作璋

馮夢龍

鄧之誠

敦敏

唐長孺

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

中國科技圖書聯合發行所 一九五三

上海人民出版社 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

藝文印書館 一九五五

群聯出版社 一九五五

學習生活出版社 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

先秦諸子的若干研究

綠煙瑣窓集

殷契摭佚續編

新刊奇妙全相註釋西廂記上·下(二冊)

敦煌壁畫集

麥積山石窟

盛世新聲

中國古代漆器圖案選

古今小說(七冊)

楚辭論文集

耐林廬甲文說卜辭求義

雁北文物勘查團報告

廣州光孝寺古代木彫像圖錄編

模印磚畫

古銅鼓圖錄

四川漢代畫象選集

欄杆拱券柱礎牆面裝飾

——中國古建築參考圖集——

杜國庠

富察明義

李亞農

商務印書館編

中國科學院編

文化部社會文化事業管理局編印

無名氏撰

北京歷史博物館編

馮夢龍撰

游國恩

楊樹達

中央人民政府文化部文物局編

商承祚

郭若愚

聞宥

聞宥集選

建築工程設計總局北京工業設計院編

新華書店 一九五五

新華書店 一九五五

中國科學院 一九五〇

新華書店 一九五五

中國科學院 一九五五

文化部社會文化事業管理局 一九五五

新華書店 一九五五

榮寶齋新記 一九五五

新華書店 一九五五

上海圖書發行公司 一九五五

上海圖書發行公司 一九五五

中央人民政府文化部文物局 一九五一

上海出版公司 一九五五

藝苑真賞社 一九五四

上海出版公司 一九五五

上海圖書發行公司 一九五五

建築工程出版社 一九五五

楚文物展覽圖錄

楚文物展覽會編

北京歷史博物館 一九五五

積微居小學金石論叢——增訂本——

楊樹達

科學出版社 一九五五

甲骨學五十年

董作賓

藝文印書館 一九五五

五十年甲骨學論著目

胡厚宣

中華書局 一九五三

殷代社會生活

李亞農

上海人民出版社 一九五五

辛棄疾傳

錢東甫

作家出版社 一九五五

金石學

朱劍心

商務印書館 一九五五

春秋會要

姚彥渠

中華書局 一九五五

簡明中國通史

呂振羽

人民出版社 一九五五

法顯傳

法顯撰

文學古籍刊行社 一九五五

中國政治思想與制度史論集（一）

張其昀等

中華文化出版事業委員會 一九五五

中國政治思想與制度史論集（二）

張其昀等

中華文化出版事業委員會 一九五五

中國政治思想與制度史論集（三）

張其昀等

中華文化出版事業委員會 一九五五

商鞅變法

楊寬

上海人民出版社 一九五五

敦煌曲初探

任二北

上海文藝聯合出版社 一九五五

古書真偽及其年代

梁啟超

中華書店 一九五五

漢代對匈奴的防禦戰爭

紀庸編

新知識出版社 一九五五

古籍考辨叢刊 第一集

顧頤剛

中華書局 一九五五

中國文學批評史

中國人類化石的發現與研究

中國古代金屬化學及金丹術

我國古代的水利工程

清平山堂話本

六朝樂府與民歌

中國古代社會史(一)

中國古代社會史(二)

敦煌藥井圖案

切韻音系

昌德宮李王實記

陳本禮離騷精義原稿留真

瀛涯敦煌韻輯

馬隊陳圖

時用鄉樂譜

雜誌

アメリカカーナ

郭紹虞

郭沫若他

王璉等

方桴編

洪梗

王運熙

李宗侗

李宗侗

中央美術學院實用美術系編

李榮

李王職

陳本禮

姜亮夫

筆者不詳

東方學研究所纂

新文藝出版社 一九五五

科學出版社 一九五五

中國科學圖書儀器公司 一九五五

新知識出版社 一九五五

文學古籍刊行出版社 一九五五

上海文藝聯合出版社 一九五五

中華文化出版事業委員會 一九五五

中華文化出版事業委員會 一九五五

新華書店 一九五五

中國科學院 一九五三

李王職 一九五〇

上海出版公司 一九五五

上海出版公司 一九五五

(韓國)思想界社 一九五五

一の一二の三

米國大使館文化交換局

跡見學園國語科紀要	四	跡見學園國語科
茨城大學文理學部紀要 人文科學	五	茨城大學文理學部
岩手大學學藝學部研究年報	七〇九	岩手大學
岩手史學研究	一八〇二一	岩手史學會
印度學佛敎學研究	三の二〇四の二	日本印度學佛敎學會
上野圖書館紀要		上野圖書館
愛媛大學歷史學紀要	一〇四	愛媛大學
大倉山論集	四	大倉山文化科學研究所
大阪大學文學部紀要	四	大阪大學
大阪學藝大學紀要 人文科學	三	大阪學藝大學
大阪學藝大學紀要 自然科學	三	大阪學藝大學
學術紀要	三〇四	岡山大學法文學部
金澤大學法文學部論集	二〇三	金澤大學
漢文學會會報	一六	東京教育大學漢文學會
岡山史學	一	岡山史學會
大谷史學	四	大谷大學史學會
大谷學報	三五の二〇四	大谷大學大谷學會
關西大學文學論集	四の二〇四	關西大學文學會

關西學院史學

三

關西學院大學史學研究室

鹿大史學

二

鹿兒島大學史學地理學研究室

藝術學

三

日本大學藝術學會

言語研究

二八

日本言語學會

研究

八

神戸大學文學會

現代中國

三一

現代中國學會

駒澤大學研究紀要

一三

駒澤大學

考古學雜誌

四〇の四、四一の二

日本考古學會

國立國會圖書館公報

七の一、九

國立國會圖書館

國學院雜誌

五三の一、五六の五

國學院大學

國語

三の四、四の二

東京教育大學國語國文學會

國立國語研究所

八、九

國立國語研究所

國體文化

三八一

日本國體學會

國史學

六五

國史學會

古代學

四の一、二

古代學協會

雜誌記事索引 人文科學

八の一、二

國立國會圖書館

雜誌記事索引 自然科學

六の一、二

國立國會圖書館

史論

三

東京女子大學歷史學研究室

西京大學學術報告人文	六	西京大學
人文科學紀要	七	東京大學教養學部人文科學科
白百合短期大學研究紀要	一〇二	白百合短期大學
ソフイア	四の二〇四	上智大學出版部
中央大學文學部紀要	一〇五	中央大學文學部
哲學年報	一九	九州大學哲學研究會
帝塚山學院短期大學研究年報	三	帝塚山學院短期大學
天理大學學報	一一一七	天理大學人文學會
朝鮮學報	八	朝鮮學會
東京學藝大學研究報告	五集 史學・地理學、六集 史學・地理學	東京學藝大學
東方學	一〇一	東方學會
東方學論集	三	東方學會
東北大學文學部研究年報	五	東北大學文學部
東洋文化研究所紀要	七	東京大學東洋文化研究所
東方古代研究	五〇六	東方古代研究會
同志社法學	二九一三四	同志社大學
東洋史學	一二一四	九州大學東洋史學研究室
東洋史研究	一三の六一四の三	京都大學東洋史研究會

東洋學報
 東洋文化
 名古屋大學文學部研究論集
 南都佛教
 日本大學世田谷教養部紀要
 日佛會館學報
 日本史研究
 一橋論叢
 美術研究
 ヒストリア
 ビブリア
 福岡商大論叢
 佛教史學
 佛教文化研究
 文化史學
 文科報告
 文學會論集

三六の四、三七の二
 一八、二〇
 一〇、一五
 二
 四
 四
 二三
 三三の五、三五の四
 一七七、一八三
 九、一三
 四、五
 六の二、三
 四の三、四、五の一
 五
 一九の二、五、六
 九
 四
 二、三

東洋學術協會
 東洋學會
 名古屋大學文學部
 東大寺南都佛教研究會
 日本大學教養部
 日佛會館
 日本史研究會
 一橋學會
 美術研究所
 大阪歷史學會
 天理大學圖書館
 福岡商科大學研究所
 佛教史學會
 智恩院佛教文化研究所
 東北大學文學會
 同志社文化史學會
 鹿兒島大學文理學部
 甲南大學

法學協會雜誌

法政史學

法文論叢

北方文化研究報告

Museum

民族學研究

山口大學文學會誌

立正史學

立命館文學

龍谷大學論集

歷史評論

歷史地理

歷史學研究

燕京學報

學林

學術季刊

古生物學報

考古學報

七二の三、七三の一

七

七

一〇

四九、六〇

一九の一、二

六の二、七の一

一七、一八

一一八、一二八

三三六、三五

六六

八五の三、四、八六の二

一八二、一九三

三九

四

四の二

二の四

八

法學協會

法政大學史學會

熊本大學法文學會

北方文化研究所

國立博物館

日本民族學協會

山口大學

立正大學史學會

立命館大學人文科學研究所

龍谷學會

歷史評論編集部

日本歷史地理學會

歷史學研究會

燕京學報編輯委員會

延禧大學校史學研究會

中華出版文化事業委員會

中國古生物學會

中國科學院考古研究所

考古學報

九

中國科學院考古研究所

考古通訊

三

考古通訊編輯委員會

臺灣風物

五の四、六の二

臺灣風物社

中央研究院院刊

二上

中央研究院院刊編輯委員會

歷史研究

一九五五の一、六

中國科學院

歷史語言研究所集刊

二六

中央研究院

中國科學院歷史研究所第三所集刊

一、二一

中國科學院

洋書 單行本

Abdurakhmanov, R., ed.; Russko-Uzbekskii slovar'. Moskva. 1954. 4°.

Ayalon, David; L'esclavage du Mamelouk. Jerusalem. 1951. 8°. (Pm). (Oriental Notes and Studies,

No. 1)

Balazs, E.; Le Traité juridique du Souei-chou. Leiden. 1954. 8°.

Bareau, André; Les sectes bouddhiques du Petit Véhicule. Saigon. 1955. 4°

Barthold, V. V.; La découverte de l'Asie—histoire de l'orientalisme en Europe et Russie. Paris.

1947. 8°. (Bibliothèque historique)

Baskakov, N. A. & Inkiyekova-Grekul, A. I.; Khakassko-Russkii slovar'. Moskva. 1953. 8°.

Beasley, W. G.; The Basis of Japanese Foreign Policy in the 19th Century. London. 1955. 8°.

Beskovnyi, V. M.; Khindi-Russkii slovar'. Moskva. 1953. 8°. (Institut Vostokovedeniya Akademii Nauk SSSR.)

Bezacier, L.; L'art vietnamien. Paris. 1954. 4°.

Boisselier, J.; La statuaire khmère et son évolution. 2 vols. Saigon. 1955. 4°.

Borton, Hugh & Elisseeff, Serge, etc.; A selected list of books and articles on Japan in English,

French and German. Cambridge, Mass. 1954. 8°.

Boxer, C. R.; Escavações históricas—Um Macaense Ilustre Frei Jacinto de Deus (1612-1681). Macau. 1937. 8°.

———; Expedições militares Portuguesas em auxílio dos Mings contra os Manchus 1621-1647. Macau. 8°. (Pm).

———; As Viagens de Japão e os seus Capitães-Mores (1550-1640). Macau. 1941. 4°. (Pm).

Boxer, C. R. & Braga, J. M.; Algumas notas sobre a bibliografia de Macau. Macau. 1939. 8°.

Braga, J.; Picturesque Macao. Macau. 1926. 8°. (Pm).

Carter, Thomas Francis & Goodrich, L. Carington; The invention of printing in China.

Chang, Chung-li; The Chinese gentry. Seattle. 1955. 8°.

Chang Siang-tseh; The Nien rebellion. Seattle. 1954. 8°.

Chu Yuan; Li Sao and other poems of Chu Yuan. tr. by Yang Hsien-yi and Gladys Yang. Peking. 1956. 8°.

- Clark, J. G. D.; Prehistoric Europe—the economic basis. London. 1952. 4°.
- Coeëds, G., ed.; Collection de textes et documents sur l'Indochine. III. Paris. 1954. 4°.
- Collinder, B.; Fénno-Ugric vocabulary. Stockholm. 1955. 8°.
- Colomban, Eudore, de; Resumo da historia de Macau. Macau. 1927. 8°.
- Columbia University Libraries, ed.; Marco Polo to Perry. New York. 1955. 8°.
- Dard, A. R.; Life of Ahmad, founder of the Ahmadiyya movement, Pt. 1. Lahore. 1949. 8°.
- De Groot, A. O. Cornets, etc.; Javansche Spraakkunst, etc.
- Dehérain, Henri; Silvestern de Sacy—ses contemporains et ses disciples. Paris. 1933. 4°. (Bibl. arch. et hist. Tom. 27; Orientalistes et aintiquaires, Tom. 2.)
- Dmitriev, N. K., ed.; Russko-Chuvashskii slovar'. Moskva. 1951. 4°.
- Dubrovskii, A. G. & Kotov, A. V.; Russko-Kitaiskii slovar'. Moskva. 1951. 8°.
- Dupont, P.; La version Mône du Nārada-Jātaka. Saigon. 1954. 4°.
- East Asiatic Library, Columbia University; Author Index to the Bibliotheca Sinica of Henri Cordier. 2 vols. New York. 1953. 4°.
- Elias, A.; Elias, modern dictionary, Arabic-English. 5th ed. Cairo. 1950. 8°.
- ; Elias, modern dictionary, English-Arabic. 8th ed. rev. Cairo. 1951. 8°.
- Embree, John F. & Dotson, Libbian Ota; Bibliography of the people and cultures of Mainland Southeast Asia, New Haven. 1950. 8°.

- Fairbank, J. K. & Banno, M.; Japanese studies of Modern China. Tokyo. 1955.
- Fillozat, Jean; La doctrine classique de la médecine indienne—ses origines et ses parallèles Grecs. Paris. 1949. 8°.
- Foucher, A., ed.; Les vies antérieures du Bouddha. (Publications du Musée Guimet LXI). Paris. 1955.
- Franke, Herbert; Zur Biographie des Pa-ta shan-jen (八大山人) (Asiatica 1954). Leipzig. 1954. 4°.
- (Pm). (Sonderdruck aus Asiatica, Festschrift Friedrich Weller, S. 119-30.).
- ; Sinologie. (W. F. G. R. Bd. 19, Orientalistik TL. I.). Bern. 1953. 8°.
- Galis. K. W.; Papua's van du Humboldt-3221. Den Haag. 8°.
- Gaudefoy-Demombynes, M. & Blachère, R.; Grammaire de l'Arabe classique. 3rd ed. Paris. 1952. 8°.
- Gibb, H. A. R. & Kramers, J. H.; Shorter encyclopedia of Islam. Ed. on behalf of the Royal Netherlands Academy. Leiden & London. 1953. 4°.
- Gluskina, A. E. & Zarubin, S. F.; Kratkii Russko-Yaponskii slovar'. Moskva. 1950. 8°.
- Goetz, Hermann; Early wooden temples of Chamba. Leiden. 1955. (Memoirs of the Kern Institute, New Series, No. 1.).
- Gonda, J.; Sanskrit in Indonesia. Nagpur. 1952. 4°. (Sarasvati Vihara ser. Vol. 28.).
- Graves, Robert & Podro Joshua; The Nazarene gospel restored. London. 1953. 8°.
- Gussen, P. J. G.; Het Leven in Alexandrië. Leiden. 1955. 8°.
- Haim, S.; New English-Persian dictionary. Vol. 1, 2. Teheran. 1930-31. 2 vols. 8°.

Hall, W. J.; Tanuma Okitsugu—forerunner of modern Japan. Cambridge, Mass. 1955. 8°. (Harvard-Yenching Institute Monograph Series, XIV.).

Hamilton, J. R.; Les Ouighours à l'époque des cinq dynasties d'après les documents chinois. Paris. 1955. 8°.

Hazrat, Mirza Bashir-ud-Din Mahmud; Āhmādiyyat or the true Islam. Washington. 1951. 8°.

———; The Holy Quran with English translation and commentary. Vol. 1, 2. Rabwah. 1947-49. 8°.

———; Islam versus Communism—brief comparison. Rabwah. 12°.

———; The message of Ahmadiyyat. (a lecture). Rabwah. 12°.

———; Muhammad—the liberator of Woman. Rabwah. 12°.

———; The philosophy of the teaching of Islam. Washington. 1953. 8°.

———; Why I believe in Islam. Rabwah. 1953. 12°.

Hillary, C. W.; England's earliest intercourse with Japan—the first Englishman in Japan 1600-20.

London & New York. 1905. 12°. (Pm).

The Honpa Honganji Mission of Hawaii, comp.; The Shinshu seiten, the holy scripture of Shinshu.

Honolulu. 1955. 12°.

Horváth, Tibor; The art of Asia in the Francis Hopp Museum of Eastern Asiatic Arts in Budapest.

Budapest. 1954. f°.

Hulsewé, A. F. P.; Remnants of Han Law. Vol. 1. Leiden. 1955. 8°.

- Jong, J. P. B. de Joselin, de; Lévi-strauss's theory on kinship and marriage. Leiden. 1952. 8°. (Pm).
- Juvaini; The *Ta'rikh-i-Jahân-Guskâ* of 'Alâ 'u'd-dîn 'Atâ Malik-i-Juwayni. Pt. 1 (E. J. W. Gibb. Memorial. Vol. XVI, 1.). London. 1912. 8°.
- Kai Kâ'ûs Ibn Iskandar, Prince of Gungân; A mirror for princes; The Qâbus Nâma. tr. fr. the Persian by Reuben Levy. London. 1951. 8°.
- Kakhana, M. G.; *Vengersko-Russkii slovar'*. Moskva. 1951. 8°.
- Kamma, F. C.; De Messianse koréri-bewegingen in het Biaks-Noemfoorse cultuurebied. Den Haag. 1955. 8°.
- Kholodovich, A. A.; *Koreisko-Russkii slovar'*. Moskva. 1951. 8°.
- Kovalensky, Pierre; Manuel d'histoire Russe—études critique des sources et exposé historique d'après les recherches les plus récentes. Paris. 1948. 8°.
- Kracke, E. A.; Civil service in early Sung China 960-1067. With particular emphasis on the development of controlled sponsorship to foster administrative responsibility. Cambridge, Mass. 1953. 8°. (H-Y-I. Monogr. ser. Vol. 13.).
- Kuo Mo-jo; *Chu Yuan—a play in five acts*. Peking. 1953. 8°.
- Lalou, Marcelle; *Manuel élémentaire de Tibétain classique*. (Méthode empirique). Paris. 1950. 8°.
- Lewicki, T.; *Polska i kraje sasiednie w świetle 'Ksiegi Rogera' geografa arabskiego z XII w*, al-Idrisi'ego. Pt. 2. Warszawa. 1954. 8°.

- Lewis, Bernard; Notes and documents from the Turkish archives. A contribution to the history of the Jews in the Ottoman Empire. Jerusalem. 1952. 8°. (Pm.). (Oriental Notes & Studies. No. 3.).
- Lockhart, L.; Nadir Shah—a critical study based mainly upon contemporary sources. London. 1938. 4°.
- Magazanik, D. A. & Mikhailov, M. S.; Russko-Turetskii slovar'. Moskva. 1946. 12°.
- ; Turetsko-Russkii slovar'. Moskva. 1945. 12°.
- Malkiel, Y.; Studies in the Reconstruction of Hispano-Latin Word Families. Berkeley. 1954.
- Manichi Jumsai, M. L.; English-Thai dictionary. 3rd ed. Baranagar. 1953. 12°.
- Mao Tse-tung; Selected works of Mao Tse-tung, Vol. 1. London. 1954. 8°.
- Maspero, Henri; Les institutions de la Chine—essai historique. Paris. 1952. 8°.
- Maulana, Abdul Karim; The existence of God. Rabwah. 1953. 12°. (Pm).
- ; The sinless prophet. Rabwah. 1953. 12°. (Pm).
- Meillet, A. & Cohen, Marcel; Les langues du monde par un groupe de linguistes. nouv. éd. [avec 21 cartes]. Paris. 1952. 8°. (Société de Linguistique de Paris).
- Miller, B. V.; Persisko-Russkii slovar'. Moskva. 1953. 4°.
- Minorsky, V.; Studies in Caucasian history. London. 1953. 8°. (Cambridge Oriental. Ser. No. 6.).
- Monte, E.; Antillians procesrecht. 1954. 8°.
- Needham, J.; Science and civilisation in China. Vol. 1, Introductory Orientations. Cambridge. 1954. 4°.
- ; Science outpost—papers of the Sino-British science co-operation office, 1942-1946.

London. 1948. 8°.

Nemzer, L. A. & Syromyatnikov, N. A.; Yaponsko-Russkii slovar'. Moskva. 1951. 8°.

Neverman, Hans; Die Indo-Ozeanische Weberei-M. M. V. H. XX. Hamburg. 1938. 4°.

Ni U. Pok.; Kannara Pya Zat. Vol. 1.

Nolde, Boris; La formation de l'Empire Russe, études, notes et documents. T. 1, 2. Paris. 1952-3.
2 vols. 8°. (Collect. hist. d. l'Inst. d'Étud. Slaves, No. 15.).

Noorduyt, Jacobus; Een achttiende-eeuwse kroniek van Wadjo—Buginese historiografie. s'-Graven-
hage. 1955. 8°.

Okayama University; An eastern Tibetan dictionary and a study of the eastern Tibetan language.

Okayama. 1954. 4°.

Omura, Jintaro; Tokyo-Berlin. von der japanischen zur deutschen Kaiserstadt. Berlin. 1903. 8°.

Plékhanov, G.; Introduction à l'histoire sociale de la Russie. tr. du Russe en Fr. par Batault-

Plékhanov. Paris. 1926. 8°. (C. H. I. E. S., No. 3.).

Polotsky, H. J.; Notes on Guraġe grammar. Jerusalem. 1951. 8°. (Pm). (O. N. S., No. 2.).

Portal, Roger; L'Oural au XVIII^e siècle—étude d'histoire économique et sociale. Paris. 1950.
(C. H. I. E. S., No. 14.).

Pulleblank, E. G.; The Background of the Rebellion of An Lu-Shan. Oxford Univ. Press. 1955. 8°.
(London Oriental Series, Vol. 4.).

- Raper, A. F., etc.; Urban and Industrial Taiwan. Taipei. 1954.
- Richardson, H. E.; Ancient historical edicts at Lhasa and the Mu Tsung/Khri Gtsug -Lde Britsan treaty of A. D. 821-822 from the inscription at Lhasa. London. 1952. 8°. (R. A. S. G. B. I. Prize Publ. F., Vol. XIX.).
- Riggen, H.; Studies in Arabian fatalism. Uppsala. 1955. 8°.
- Roisner, I. M.; Razvitiie feodalizma i ofrazovanie gosudarstva u afgantzev. Moskva. 1954. 8°.
- Rundgren, Frithiof; Über Bildungen mit š- und n-t- Demonstrativen im Semitischen. Uppsala. 1955. 8°.
- Shelekasov, P. V.; Kratkii Russko-Kitaiskii i Kitaisko-Russkii vnesmetnoryoye slovar'. Moskva. 1952. 16°.
- Solomon, B. S., tr.; The veritable record of the T'ang Emperor Shun-tsung. Cambridge, Mass. 1955. 8°. (Harvard-Yenching Institute Studies, XIII.).
- Storey, C. A.; Persian literature—a bibliographical survey. Vol. 1, Pt. 2. London. 1953. 8°.
- Sutherland, Lucy S.; The East India Company in eighteenth-century politics. Oxford. 1952. 8°.
- Tadière, L.; Cayuo et pretigue religieuses des Vietnamiens. Saigon. 1955. 4°.
- Tenri Central Library; Catalogue of special books on Christian missions. Vol. II. Tsintsius, V. I. & Rishes, L. D.; Russko-Evenskii slovar'. Moskva. 1952. 8°.
- Usatov, D. M.; Russko-Koreiskii slovar'. Moskva. 1951. 8°.
- Walker, John M. A.; A catalogue of the Arab-Sassanian coins. London. 1941. 8°.

Weaver, J. R. H.; The dictionary of national biography.

Welhausen, J.; The Arab kingdom and its fall. tr. by Margaret Graham Weir. Calcutta. 1927. 8°.

Wenck, G.; Japanische Phonetik. 2 vols. Wiesbaden. 1954. 8°.

Whitaker, K. P. K.; Structure drill in Cantonese—1st fifty patterns. London. 1954. 12°. (Structure drill through speech patterns, 4.).

Wickens, G. M.; Avicenna: Scientist & philosopher, a millenary symposium. London. 1952. 8°.

Wilber, Donald N.; Iran past and present. Princeton. 1950. 8°.

Zajackowski, A.; Słownik Arabsko-Kiepczacki z okresu Państwa Mameluckiego—Balgat almušīṭāq fi lughat at-turk wa-l-qifzāq. Warszawa. 1954. 8°.

雜 記

Australia

University of Queensland

Journal of Politics & History, 1-1

Bulgaria

Bulgaria, 1954-8; 1955-1~8

Bulgaria Today, 1955-1~24

Bulgarie d'Aujourd'hui, 1955-1~24

Burma

Burma Research Society

Journal of Burma Research Society, 38-1

Ceylon

National Museums

Administration Report of the Director of National Museums, 1954

Ceylon National Museums Publication, Aug. 1955

China

National Library of Peking

China Reconstructs, 4-3~12; 5-1, 2

People's China, 1955-2~6; 1955-13~16

Women of China, 1955-March

Denmark

Det Kongelige Danske Videnskaberne Selskab

Historisk-filologiske Meddeleser, 34-3, 4, 5; 35-1, 2

Royal Library

Acta Archaeologica, 24

England

Asia Major 5-1

Bodleian Library

Bodleian Library Record, 5-2, 3, 4

Cambridge University Library

Report of the Library Syndicate, 1953/4

India Office Library

Report for the year, 1954/5

Royal Anthropological Institute

Man, 54-157~308 ; 55-1~160

Royal Asiatic Society

JRAS, 1955-1/2, 3/4

Royal Geographical Society

The Geographical Journal, 121-1, 2, 3, 4

School of Oriental & African Studies

BSOAS, 17-1, 2, 3

Finland

Finn-Ugric Society

Memoirs, 108, 110

Formosa

National Taiwan University

Bulletin of the Dept. of Archaeology & Anthropology, 5

The Ethnological Society of China

Bulletin of ESC, 1 (1955) (中國民俗學報)

中華文化出版事業委員會

Academic Review Quarterly 4-2 (學術季刊)

France

Bibliothèque nationale

Journal asiatique, 241-4 ; 242-1, 2

Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale, 49-1, 2, 3, 4

Revue de l'Histoire des Religions, 146-2 ; 147-1, 2

Institut des Hautes Etudes Chinoises

Bibliothèque de l'Institut des H. E. C., 9, 10

La Revue Historique

Revue historique, 213-1

Société asiatique de Paris

Journal asiatique, 242-1, 3/4 ; 243-1

Germany

Deutsche Forschungsgemeinschaft

Bericht der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1954-55

Saeculum, 6-2, 3

Ural-Altische Jahrbucher, 27-1/2

Deutschen Morgenländischen Gesellschaft

Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, 105-1, 2

Institut zur Erforschung der UdSSR

Dergi, 2, 3

Seminar für chinesische Sprach und Cultur

Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 76 (1954)

Oriens Extremus, 2-1

Dozent Dr. Otto Karow

Die Welt des Islam, 4-1, 2/3

Holland

T'oung Pao, 43-3/4

Koninklijk Instituut voor de Tropen

Jaarverslag, 1954

Hong Kong

University of Hong Kong Library

Journal of Oriental Studies (東方文化), 2-1

Hungary

Francis Hopp Museum

Az Iparművészeti Múzeum Eukönyvei, I, 1954

India

Calico Museum of Textiles, Ahmedabad

Journal of Indian Textile History, 1

The Ramakrishna Mission Institute of Culture

Bulletin of the RMIC, 6-1~12

Indonesia

Lembaga Kebudajaan Indonesia

Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde, 85-3 (1955)

Italy

Istituto Italiano per il Medio, ed Estremo Oriente

East & West, 5-4; 6-1, 2, 3

Japan

Monumenta Nipponica

Monumenta Nipponica, 11-3

日華文化研究所

Folklore Studies, 14

Acta Orientalia, 22-1/2

Korea

延禧大學

學林, 4 (1955)

Seoul 大學

Collectio Thescon Scientia Naturalis, Univ. Seoulensis, 2 (1955)

Norway

Tromsø Museum

Acta Borealia, Humaniora, 1, 2, 3 (1952)

Pakistan

Al-Islam

Al-Islam, 3-6

Poland

Prof. M. Lewicki

Rocznik Orientalistyczny, XIX

Siam

The Siam Society

The Journal of the Siam Society, 42-2, 43-1

The Natural History Bulletin of the Society, 16 (1954)

South Viêt-nam

Asia

Asia, No. 16

École Française d'Extrême-Orient

Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, 46-2, 47-1/2

France-Asie

France-Asie, 109/110, 112, 113, 114/115, 116

Société des Etudes Indochinoises

Bulletin de la SEI, 29-4, 30-1, 2, 3.

Sweden

The Museum of Far Eastern Antiquities

Bulletin of MFEA, 27 (1955)

Universitetsbiblioteket, Uppsala

Orientalia Suecana, 3-2/4 (1954)

Acta Orientalia, 22-1/2

Royal Library

Kungl. Bibliotekets Årsberättelse, 1954

U. S. A.

American Oriental Society

JAOS, 74-4, 75-1, 2, 3, 4

University of California

Anthropological Record, 14-3

Publication in Linguistics

Publication in American Archaeology and Ethnology, 44-3, 46-1

Publication in Classical Archaeology, 3-2

Columbia University

Chinese Collections Newly Catalogued Books, 11, 12, 13

新書目錄 38, 39, 40

Cornell University

Far Eastern Quarterly, 14-2, 3, 4, 5; 15-1, 2

Smithsonian Institution

- Annual Report of the Smithsonian Institution (off print), 1953
- Ars Orientalis*, 1 (1954)
- Freer Gallery of Art, Occasional Papers, 2-2
- Smithsonian Miscellaneous Collections, 124, 126-2
- Abstracts of Technical Studies in Art and Archaeology, 1943-52
- Harvard-Yenching Institute
- Harvard Journal of Asiatic Studies, 17-3/4, 18-1/2
- Official Register of Harvard University, 15 (1952)
- University of Illinois
- Illinois Studies in Social Sciences, 34-4
- Library of Congress
- Bibliography of Periodical Literature on the Near & Middle East, 35, 36, 37
- Quarterly Journal of Current Acquisitions, 12-2, 3, 4; 13-1, 2
- The United States Quarterly Book List, 11-1, 2, 3, 4
- Peabody Museum of Archaeology and Ethnology
- Peabody Museum Papers, 34; 41-3; 42-1, 2, 3; 43-1; 49-2
- Eighty-Seven Reports on the Peabody Museum, 1952/1953

USSR

Biblioteka SSSR imeni V. I. Lenina

Izvestiya Akademii Nauk, 14-1, 2, 3, 4, 5, 6

Uchenye Zapiski Instituta Vostokovedeni, XI (1955)

五 事 業

1 刊 行 圖 書

○和田 清著『東亞史研究（滿洲篇）』 東洋文庫論叢第三十七 昭和三十年十二月 A五版 六八八頁 索引一六
頁 圖版四葉 地圖二葉 英文要旨一二頁
本書には、著者の滿洲に關する研究のうち、『東亞史論叢』（生活社 昭和十七年十二月）に既收のものを除いた十八篇の論文が載せられている。その題目は次の如くである。

一、玄菟郡考

二、魏の東方經略と扶餘城の問題

三、渤海國地理考

四、唐代の東北アジア諸國

五、兀惹考

六、定安國について

七、元代の開元路について

八、開元・古州及び毛憐

九、滿洲を三韓といふことについて

一〇、明初の滿洲經略 上

一一、明初の滿洲經略 下

- 一二、建州本衛の移動について
 - 一三、海西東水陸城站について
 - 一四、明末に於ける鴨綠江方面の開拓
 - 一五、滿洲諸部の位置について
 - 一六、清祖發祥の地域について
 - 一七、清の太祖興起の事情について
 - 一八、清の太祖の顧問龔正陸
- なお、附録として「學究生活の想出」と題する一文を收む。

○橋本増吉著『東洋史上より見たる日本上古史研究』 東洋文庫論叢第三十八 昭和三十一年三月 A五版 一〇
四三頁 圖版六葉 英文要旨八頁

本書は、昭和七年十一月、東京大岡山書店より刊行せられた『東洋史上より觀たる日本上古史 一（邪馬臺國論考）』および戦後雑誌「史學」に發表せられた「邪馬臺國と大倭國との關連について」、「日本建國の年代について」の二篇に増補改訂を加え、前者を「第一篇 邪馬臺國論考」、後者を「第二編 日本建國考」と題して收載したものであり、その内容目次は次の如くである。

第一篇 邪馬臺國論考

一、緒言

二、史料

三、翰苑所載本文の批判

四、問題の要點

五、里程記事と日程記事

六、瀬戸内海路と日本海路

七、方向に關する疑問

八、狗奴國の問題

九、國王の問題

一〇、翰苑記事内容の考察

一一、倭人諸國の實情

一二、官名・人名及び國名の問題

一三、戸數の問題

一四、遺跡の問題

一五、倭人の種族

一六、風俗習慣に關する疑問

一七、喪葬と墓制

一八、卜法と信仰及び刑法

一九、屋室と生活及び生業

二〇、產物と動植物

二一、白珠・青大句珠と生口

二二、行政と交易

二三、倭人國の史實と書紀の太歲記事

二四、紀年の研究

二五、紀年の推定

二六、三國時代東亞の實情

二七、結論

第二篇 日本建國考

一、緒言

二、史料

三、日本建國の年代

四、國名の問題

五、結論

なお、紹興板「魏志倭人傳」全文を圖版として巻首に載せ、末尾に參考文獻を附している。

○滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』I（太祖） 東洋文庫叢刊第十二 昭和三十年八月 B五版 四七七頁 圖版

三葉

滿文老檔は清朝初期（十七世紀の前半三十年）、滿洲文で書かれた編年體の王朝の記錄で、この時代の根本史

料として最も貴重なものである。總計百八十卷という膨大な冊數から成り、その内容も多種多様で、あらゆる分野に亘つて、大小様々な政治上の問題より宮廷の祕事に至るまで、極めて詳細に記され、その正確・詳密なことは他に比すべきものがない。その滿洲文は未だ漢語の影響の少い素朴な形をよく残して居り、滿洲古語の研究資料としても注目すべきものである。

本書は内藤湖南博士の撮影に係る奉天故宮崇謨閣藏の有圈點滿文老檔の寫真本を底本として、これをメルレンドルフ式でローマ字に轉寫した上、その一語一語の單語の原義を明確に示す逐語譯を附し、更に、原文に忠實であるとともに達意を旨とした意譯を附してある。また、原文の脫落、譌誤、不明等の箇處には註を加えてある。

本書第一冊には、太祖八十三卷のうち、第一卷より第三十一卷まで、年代的にいつて、萬曆三十五年（一六〇二）三月より天命六年（一六二二）十二月までが收められている。

○前間恭作編『古鮮冊譜』第二冊 東洋文庫叢刊第十一 昭和三十一年三月 B五版 六一六頁 圖版三六葉

本書は、曩に昭和十九年四月發刊の第一冊（ア～コ）に續くもので、朝鮮本を書名により五十音順に排列して、サよりソまでの分を收録し、著者名およびその略傳、序跋・版種・版地・丁數・版本所在・書誌學的解題などを記す。所收書目は、自家所藏本はもとより、諸種目錄あるいは實見にもとづき、廣く古今東西に亘る公私所藏本を網羅している。

○東洋文庫歐文紀要第十四 昭和三十一年三月

Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No.14, 1955

Kazuo ENOKI 榎一雄 ; Researches in Chinese Turkestan during the Ch'ien-lung 乾隆 Period

with special reference to the Hsi-yü-t'ung-wen-chih 西域同文志

Chüzö ICHIKO 市古宙三 ; The Railway Protection Movement in Szechuan in 1911

Hirosato IWAI 岩井大懋 ; The word Pieh-ch'i 別乞 *Beki* and Mongol Shamans

Takeshi SEKINO 關野雄 ; On the Black Pottery of Ancient China

G. W. ROBINSON ; The Kuji Hongi 舊事本紀

Kengo YAMAMOTO 山本謙吾 ; On the Verb Form in *-cina* in Script Manchu

2 講演會・展示會

昭和三十年五月二十二日 羽田亨博士(理事)追悼講演會、および敦煌文書展示會

開會の辭

和田 清

講演「羽田博士の經歷と業績」

石田幹之助

追憶談 宇野 哲人

原田 淑人

大村謙太郎

日高第四郎

岡野 澄

三島 海雲

講演「『大月氏および貴霜について』とその後の發展」

榎 一雄

閉會の辭

藤井甚太郎

昭和三十年六月七、九日 董作賓氏講演會、および龜甲獸骨文展觀

講演「甲骨文字より見たる古代曆法について」

中國歷史語言研究所長 董

作 賓

昭和三十年十月十日 トウッチ博士講演會、および西藏文獻展示會

講演「西藏史研究史上における新獲史料について」 イタリア中亞極東學院長・ローマ大學教授

ジュゼッペ・トウッチ

昭和三十年十一月一〜七日 國立國會圖書館「日本の辭書展示會」

東洋文庫所藏の和・漢・洋辭書三十數冊を出陳した。

昭和三十年十一月十三日 日本西藏學會第三回總會、および西藏文獻展示會

講演「玄奘三藏の大唐西域記の西藏譯について」

大谷大學助教授 佐々木敦悟

「金城公主について」

京都大學助教授 佐藤 長

「西藏の紀年考」

東京大學講師 青木文教

3 談話會

昭和三十年四月十六日 「マン族の山關簿」

山本達郎

北部トキン地方のある種のマン族の間には、「山關簿」と題するいわば特許狀ないし證明文書が傳えられ、それには彼等の祖先の說話や中國側からの稅役の免除、交通・移住の自由といった特權、權利などが記載されている。

パリのアジア協會 (Société Asiatique) には、故 H. Maspero 教授蒐集本の一つである「山關簿」、即ちそうしたマン族の特許狀の一つが所藏されている。この文獻は元來、一九〇〇年 Cao bang 地域で或る陸軍士官が採集し

たもので、Man Ja-pan (Man Cóc) の間に流布していたものと見做される。問題の文獻は異體の漢文で記されて居り、四つの部分に分けることが出来る。(一) マン族の祖先に關する證明文書の體裁での神話の記述、(二) 特許狀が中國官邊筋から發行せられたものか否かの記述、(三) 年表、(四) 祈禱文ないし祭文、である。最初の部分には、前半に盤護あるいは盤明護という名で槃瓠説話が、後半に洪水説話がみえてゐる。ここで特に注目すべきことは、この靈犬を先祖とする物語と中國浙江省敕木山の畚民の所傳のそれとが頗るよく一致することである。第二の部分に示される資料にもとづくと、マン族が移住するに當つてつたおおよその徑路を辿ることが出来る。即ち、廉州府石康縣(廣東省合浦縣の東北)地域から廣西省西南端の國境に接した鎮安州まで、時期は明初——或は宋末あたりからかも知れないが——から一七〇四年に至る間のことである。マン族の神話も畚民のそれも共に廣東省潮州附近の鳳凰山をその發祥地としてゐることが知られる。第三の年表の部分では、大業(六〇五—六一五)から乾隆にいたるまでの中國の年號がみられるが、明らかに前後錯雜した記載を含んでゐる。この年表の内容は、マン族の間に於ける歴史的知識の性格を物語つてゐる。

昭和三十年六月十八日 「戰國時代における周」

宇都木 章

史記、周本紀によると、周の王室は平王以來雒邑(洛陽)に都していたが、考王にいたつて弟を河南に封じて桓公とし、桓公の曾孫は更に鞏に封ぜられて東周の惠公となつたといひながら、またそののち王赧の時、東・西二周に分れ、王赧は西周に徙つたとある。

この問題をめぐつて、大別すると二つの論がある。一つは、趙翼によつて代表される如く、周王は成周(洛陽)に居り、西周は考王以後王城(河南)に、東周は顯王頃から河南の鞏に成立したという王室存在の考え方であり、

他の一つは、崔述によつて示される如く、趙世家成侯八年の趙と韓とが周を分つたという記載をもととして、周の顯王二年以來、周は東西に分裂して、周の天子はここを以て亡んだという考え方である。

「思うに、前者は周都を敬王より成周（洛陽）とする公羊傳の流れをくむ史料から擴大されて來た結果であり、左傳にいう如く、周都は敬王の時も王城（河南）であると見て差支えないならば、周本紀考王十五年條の前半は無意味となつて、當然後者の説が妥當とされるであらう。

周本紀において王赧以下の記載に混亂が多くなつた所以は、この兩者が接合されたからであると考えられる。従つて、周本紀本來の筋からいえば、王都は洛陽にあつて存続したのであり、東・西二周は河南に於いて分裂したものであるとすべきであらう。

昭和三十年七月十六日 「先秦の國家と地方都市」

關野 雄

春秋戰國時代に文化が飛躍的に進んだのは、都市の發達によるところが大きい。當時の貨幣を見ると、總じて、「刀」には地名がなく、「布」にはほとんど地名（都市名）が表わされている。これは、刀の鑄造權が國家に、布の鑄造權が各都市にあつたことを示すものであらう。布が流通したのは、主に三晉を中心とする黃河中原の地帯で、そこには大小の地方都市が繁榮し、それぞれ獨立の經濟力と軍事力を持つていた。従つて、こうした地域における國家は、地方都市の勢力を抑えるのに常に汲々としていたのである。

一方、貨幣鑄造權の掌握に最も成功したのは、秦と楚であつたらしい。ことに秦は後進國である面を逆用して、國內に強力な地方都市がないのを幸い、他の六國に先んじて全國に郡縣制を施行し、中央集權の基礎を固めた。古い文化の傳統を有し、豊かな富をたたえた中原の諸國は、その機構が專制的な體制に即應しなかつたために、文化

の程度は低いが全體主義に徹した秦の前に、もちろん瓦解しきつたのである。

昭和三十年十月十五日 「朝鮮議政府考」

末松保和

李朝五百年を通じて最高の政治機關であつた議政府は、詳しくいえば、その最初九年間（一四〇〇年まで）は都評議使司といつた。都評議使司は前王朝（高麗）の後期、一二七九年に、臨時的に、政治の合議制として出發したものであつたが、高麗から李朝への革命の際には、政權・兵權を併せ握つて、革命の總本部となつた。しかし、一四〇〇年、政權と兵權とが分離されたにともなつて、その名も議政府と改定され、専ら政權の府となつた。その後、李朝の政治が平常化の途を進み、吏・戸・禮・兵・刑・工の六曹に分化執行されるようになるに伴つて、議政府の權限はおのずから縮小された。

他面、革命後の歲月がたつにつれて、國王の權力は、安定し増大し、これは議政府の權力（換言すれば重臣達の權力）と對立した。そのため、議政府の執行範圍は、一五一六年までの百二十年間に、四度變動したが、遂には議政府の優位に歸著した。それはいわば臣權の勝利であり、ここに我々は李朝を通じての王權の比重を把握し得るのである。

昭和三十年十一月十九日 「古典チベット語文法について」

山口瑞鳳

古典チベット語文法の研究は、佛典翻譯のために用いられたものとその他のものとを充分區別して進める必要がある。というのは、サンスクリット系の原典と翻譯當時のチベット語とでは、語彙・表現能力ともに、大きな懸隔があつて、この隔りを補うために、この種のチベット語では非常に無理な表現技巧が凝らされたからである。このよ

うな言語を、自然な發展を辿つたものと同日に論ずることは危険である。勿論、今日の口語から常識的に解讀しうなどすることは不見識きわまることである。

このような危険を避けて、慎重なサンسكريット原典との比較による解釋學的研究を進め、その上で、特殊性を意識しながら、チベット語自體の構造的性情を探らねばならぬ。そのためには、古寫本を通じて得られる新舊兩譯の相違はもとより、その後の版本時代のものでも、新舊兩版・異版の間の相違を慎重に考察しなければならぬ。なお、梵語文典の影響を受けたチベットの傳的文典家たちは、後代の、それに批判的な人々をも含めて、我々が今日解明しようとしているものについてそのまま利用し得る資料を提供するものではない。勿論、印歐語的見解による分析も極力これを排せねばならない。また既成の如何なる文法的分類も安易に援用してはならない。

昭和三十一年一月二十一日 「占城國 (Champa) 末期の王都について」 岩 生 成 一

印度支那半島東南隅に在つた占城國については、G. Maspero 氏を始め多くの研究もあるが、何れもその發祥より十五世紀末までの歴史を扱つたもので、十七世紀末にいたる同國末期の歴史を研究したものは少なく、その王都の位置についても未だ確説が無い。しかし大南一統志の平順 (Bin Thuan) 省の古蹟の條に、占城王の王宮趾が同省禾多 (Hoa Da) 縣永安 (Vinh Yen) 社に在つたことが見え、一時同地に王都のあつたことが推定される。而して蘭人 Cornelis Matelief de Jong の船圖は、一六〇七年十月中旬 Cabo de Pulo Cecir (今の Pandaran 岬) から南航十五乃至二十哩にして、占城國の碇泊地に投錨したが、當時同處に葡萄牙船・支那船や日本船も來航貿易し、同地は恰度大河の河口で、その附近に大都會もあり、北緯十一度に在る岬の北方に位し、その郊外に王宮もあると記しているが、此の大河口とは、永安社を通つて海に注ぐ潘里 (Phan Ri) 海口と思われる。一六一七年

五月英船も同國に來航し、Paria に投錨し、即時國王から貿易許可を得たが、偶々朱印船も寄港していた。此のParia を潘里の訛音と見れば、その頃の占城の王都の位置も明らかとなる。

六 研究活動

1 機關研究

「大英博物館、A・スタイン卿蒐集敦煌文書のマイクロ・フィルム撮影並にその整理研究」

研究擔當者 岩井大慧

研究協力者 江上波夫（東洋文化研究所） 榎一雄 貝塚茂樹（人文科學研究所） 辻直四郎（東京大學） 那波利貞

（京都大學） 羽田野伯猷（東北大學） 干潟龍祥（九州大學） 吉川幸次郎（京都大學） 山本達郎

昭和二十八年、榎一雄研究員の監督下に撮影・整理した大英博物館所藏敦煌文書のマイクロ・フィルム二二〇リールは、昭和三十年十二月二日、外務省を経て到著。その反轉、複寫にとりかかった。

2 職員の研究業績

岩井大慧

“The Word Pieh-chi 別乞 Beki and Mongol Shamans,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 14, 1955.

河野六郎

「朝鮮語」『世界言語概説』下卷、研究社、昭和三十年五月

末松保和

「朝鮮議政府考」〔朝鮮學報〕第九輯)

關 野 雄

『中國考古學研究』(東京大學東洋文化研究所、昭和三十一年三月)

「彌生時代における中國の情勢」〔日本考古學講座〕第四卷、河出書房、昭和三十年四月)

「秦漢南北朝の無釉陶」〔世界陶磁全集〕第八卷、河出書房、昭和三十年八月)

“On the Black Pottery of Ancient China,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 14, 1955.

田 川 孝 三

「李朝貢物考」〔朝鮮學報〕第九輯)

田 中 正 俊

「十六・七世紀の中國農村製絲・絹織業」〔『世界史講座』第一卷、東洋經濟新報社、昭和三十年八月) 佐伯有一氏と

共同研究

松 村 潤

『滿文老檔』I (東洋文庫、東京三十年八月) 滿文老檔研究會の一員として、江實・神田信夫・岡本敬二・岡田英弘の

諸氏と共同執筆

三 根 谷 徹

「安南語」〔『世界言語概説』下卷、研究社、昭和三十年五月)

山 口 瑞 鳳

「チベット語の自動詞文について」〔大倉山學院紀要〕昭和三十年第一卷

山根幸夫

「一九五四年の歴史學界——回顧と展望——」〔東洋史、明・清〕〔史學雜誌〕六四編五號

『世界歴史事典』史料篇、東洋、清代（平凡社、昭和三十年十月） 神田信夫氏と共同執筆

和田清

『東亞史研究（滿洲篇）』〔東洋文庫、昭和三十年十二月〕

『東洋史上より見たる古代の日本』〔ハーバード・燕京・同志社東方文化講座第九輯、昭和三十年二月〕

『東洋史』〔NHK教養大學、昭和三十一年五月〕

「佛教東傳の年代について」〔佐々木教授古稀記念論文集〕、昭和三十年十二月

「歷史上より見たる支那商人の位置」〔史學〕二九卷一號

附

1 東洋學術協會

會長 和田 清

評議員 石田幹之助

梅原末治

岩井大慧

岩生成一

末松保和

榎一雄

白鳥清

原田淑人

津田左右吉

橋本増吉

和田 清

三上次男

山本達郎

編輯委員 榎一雄

河野六郎

關野雄

田中正俊

本田實信

松村潤

三根谷 徹

山根幸夫

山本達郎

和田 清

東洋學報三八卷一號～四號内容

三八卷一號(昭和三十年六月)

兀菴考.....

和田 清

論語の思想的性格.....

小倉芳彦

清代滿洲の交通路について.....

園田一龜

東晉朝中原恢復の一考察……………越智重明

中國ムスリムと宗族組織……………中田吉信

三八卷二號（昭和三十年九月）

コロムプスと『東方見聞録』……………杉本直治郎
伊東隆夫

秦漢時代の入蜀路について（上）……………久村因

宋詞押韻字に見られる音韻上の一二の特色……………坂井健一

三八卷三號（昭和三十年十二月）

周代の庶民祭禮における神……………松本雅明

南宋建國期の武將勢力に就いての一考察……………山内正博

秦漢時代の入蜀路について（下）……………久村因

三八卷四號（昭和三十一年三月）

楊炎の兩税法に於ける税額の問題……………日野開三郎

突厥初期の可汗系譜について……………伊瀬仙太郎

唐末五代の假父子的結合における姓名と年齢……………栗原益男

吉林城東の磨崖文字……………園田一龜

2 ハーヴァード・エンチン・グラント運営委員會

前年度に引き続き、交附された資金をもつて、左記の出版および研究を助成した。

出版

滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』I

橋本増吉著『東洋史上より見たる日本上古史研究』

研究

「十五世紀以降の中國における鄉村統治の研究」 山根幸夫

「蒙古人侵入以後の東トルキスタン史の研究」 松村潤

3 近代中國研究委員會

ロッキンフェラー財團の援助のもとに、昭和二十九年秋、左の如きメンバーによつて發足した。

運営委員 市古宙三 牧野巽 村松祐次 山本達郎

和田清

會員 市古宙三 衛藤瀋吉 神田信夫 佐伯有一

重田徳 多賀秋五郎 田中正俊 中田吉信

中山八郎 波多野善大 坂野正高 牧野巽

村松祐次 矢澤利彦 山根幸夫 山本澄子

山本達郎 和田清

毎月定例二回、研究發表會をもつ他、臨時に講師を招き、また各種の文獻史料目錄を刊行している。毎年メンバーの中から一人ずつ留學者を送り、第一年度は市古宙三氏、第二年度は坂野正高氏が渡米した。なお詳細は同會發行の『近代中國研究委員會報』（不定期）に詳しい。

昭和三十三年三月二十五日
昭和三十三年三月三十一日

〔非賣品〕

東洋文庫年報

發行者

東京都文京區上富士前町一四七
岩井大慧

印刷所

東京都千代田區神田猿樂町二ノ四
株式會社新榮堂

發行所

東京都文京區駒込上富士前町一四七
財團法人東洋文庫

（振替東京六七〇二三番）

